

ブラジルポルトガル語における Wh-Movement と Focalization について

石 岡 精 三

ブラジルポルトガル語における Wh-Movement と Focalization について

石 岡 精 三*

Wh-Movement and Focalization in Brazilian Portuguese

Seizo ISHIOKA*

Key words : Checking (Domain) Focus, Relativized Minimality

0. はじめに

以下のブラジルポルトガル語 (Brazilian Portuguese (BP)) の用例からも判明するように, Wh 要素の左方移動が発動した場合, 定動詞と主語要素の相対語順に異同が観察される。(1) において, 主語要素が定動詞の右方に生起する派生は, 不適格と判断される。(2) において, この語順は許容される。(1) と (2) の双方において, Wh 要素と定動詞の間に主語要素が生起する派生は, 適格と判断される。¹⁾

(1) a. *o que comprou o Paulo? (Silva 1999: p.3, (5b))

what bought Paulo

b. o que o Paulo comprou? (ibid.: (5a))

‘ what did Paulo buy? ’

(2) a. que diz a senhora? (Gartner 1994: p.264)

what says the lady (you)

‘ what do you say? ’

b. quem voce viu? (Gartner 1998: p.641)

whom you saw

‘ whom did you see? ’

(3) で示されるように, BP の他動詞文において, 主語要素は定動詞の左方

原稿受付: 平成12年 5月19日

*長岡技術科学大学語学センター

に生起する。通例、主語要素が定動詞の右方に生起する他動詞用例は、不適格と判断される。グループの用例である(1a)の非文性は、(3b)のそれと並行するものと考えられる。しかしながら、グループに属すと考えられる(2a)は適格と判断される。²⁾

(3) a. a Bia comprou um livro aqui (Silva 1999: p.46, (1a))

Bia bought a book here

b. *comprou a Bia um livro aqui (ibid.: (1b)))

'Bia bought a book here'

本稿では、(2a)の適格性を説明する論法が提示される。具体的には、グループに対して、(1a)の違反を回避するStrategyの存在が想定される。

本稿は、以下のように構成される。第1節において、ポルトガル語のCP構造と本稿で採用される定義・仮説体系が提示され、併せてBPの特殊性(特に、主語要素の位置)が言及される。第2節では、Focalizationのプロセスが言及される。第3節において、上の(1a)と(2a)の相違を説明と思われる論法が提示される。第4節は結語を構成し、いくつかの問題点が指摘・検討される。さらに補遺として、本稿の仮説体系に関連する事象に関して初歩的な考察が加えられる。

1. ポルトガル語のCP構造, 定義・仮説体系とBPにおけるWh Interrogative

石岡(1999)では、スペイン語に対して(4a)の構造が想定された。ポルトガル語のCP構造として、(4b)が妥当すると考える。スペイン語のAgrsと異なり、ポルトガル語のAgrsはAgrsPまで投射される(Spec(Agrs)が生成される)([補遺3]で述べるように、スペイン語に対して構造(4b)を想定すべき事例が存在するが)。Pol₁とPol₂は通常、Pol'まで投射される。ある一定の条件下で、PolPまで投射される(後述)。

(4) a. [CP [1' [Pol₁' [Pol₂' [Agrs' ... [VP]]]]]]

b. [CP [1' [Pol₁' [Pol₂' [AgrsP ... [VP]]]]]]

(1b)と(2b)に対応するスペイン語用例は、不適格と判断される。このスペイン語用例の非文性は、以下に述べる仮説体系によって説明される。

(5) a. ¿qué trajo el cartero? (Toribio 1993:p.128)

- what brought the mailman
 b.* ¿qué el cartero trajo? (ibid.)
 ' what did the mailman bring? '

Contreras (1991) は, Rizzi (1990) で提唱される Relativized Minimality (相対化された最小原理) を Adjunction Structure にも拡張する。石岡 (1999) では, 当該最小原理が以下のように定義される。これは, 範疇 X の最大投射に最大範疇 YP が左方 (右方) 付加した位置に移動している場合, さらに他の最大範疇 ZP が左方 (右方) 付加する移動を排除するものである。₁ に付与された素性 [+wh] が順次 Agrs₁ まで受け継がれる (下方浸透する) 旨の仮説 (7) を設定する。当該素性をもつ最大範疇は, 同じ素性を付与・伝達されたゼロ範疇である Agrs, Pol₂ と Pol₁ の Checking Domain (この場合, 当該範疇の最大投射に左方付加した位置) を経由し, その最終着地点と同定される ₁ の Checking Domain (₁ に左方付加した位置) へ移動する。

(6) Extended Relativized Minimality (ERM): ³⁾

- X antecedent-governs Y iff there is no Z, Z (X⁰, A-Specifier, A'-Specifier, and Adjunct which is strictly adjacent to and in the same adjunction direction as X) such that
 (a) Z is a typical potential antecedent-governor for Y, and
 (b) Z c-commands Y and does not c-command X.

(7) Hypothesis:

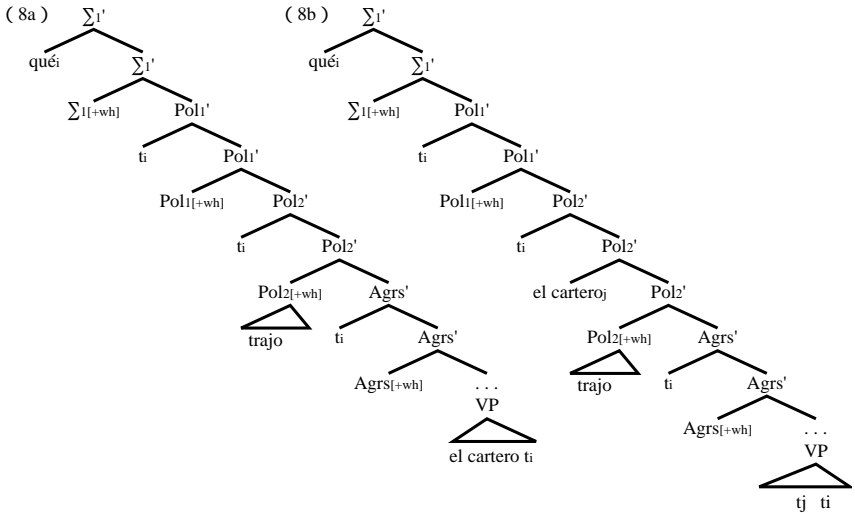
- ₁, assigned the feature ([+wh]), obligatorily transmits/percolates the feature involved successively down to Agrs at D-structure.

素性 [+Topic] をもつ最大範疇が生起する場合, Pol₁ (あるいは Pol₂) に素性 [+Topic] が付与される (Topicalization)。少なくともスペイン語において, 素性 [+Topic] が下方浸透することはない。よって, [+Topic] XP は, それが基底生成された位置から一挙に Pol₁ (あるいは Pol₂) の Checking Domain へ移動する。

これらの前提により, (5a, b) の相違が説明可能となる。(5a, b) に対して, それぞれ (8a, b) の派生構造が想定されることになる (Pol₂ に素性 [+Topic] が付与される派生で考える)。⁴⁾

主語 NP (*el cartero*) は Topicalization の適用を受け, Pol₂' に左方付加した位置へ移動する。[+wh] 要素 (*qué*) は, Agrs', Pol₂' と Pol₁' に左方付加した位置を経由して, ₁ の Checking Domain へ移動する。(5b) に対応する派生構造 (8b) において, Pol₂' に左方付加した [+Topic] NP (*el cartero*) が ERM Barrier を構成

する。よって、Pol2' に左方付加した位置にある [+wh] 要素の中間痕跡 (ti) は、Agrs' に左方付加した位置にある痕跡 (ti) を先行詞統率することはない。つまり、(8b) の派生構想は、ECP (ERM) によって排除されることになる。派生構造 (8a) において、主語 NP (*el cartero*) に素性 [+Topic] が付与されることはない (当該主語要素は、それが基底生成された位置にとどまる)。結果として、(8a) では、ECP (ERM) 違反が観察されない。



明らかに、スペイン語用例 (5a, b) の相違を説明する論法を対応する BP の用例 (1) と (2) に適用することはできない。(1b) と (2b) が共に、不適格と予測されることになる (問題点)。BP に対して、スペイン語の派生 (8b) における ERM 違反を回避する Strategy を想定すべきと考えられる。ここで、BP の用例 (3b) の非文性に立ち戻る。通例、他動詞用例における顕在的な主語要素は、定動詞の左方に生起する ((3b) の非文性)。この非文性は、どのように説明されるであろうか。

ポルトガル語の定動詞は、Agrs 位置に生成されると考える。ポルトガル語の Agrs は、AgrsP まで投射される。スペイン語とヨ - ロッパポルトガル語 (European Portuguese (EP)) の場合と異なり、BP の顕在的な主語要素は、Agrs の Checking Domain へ移動する必要がある (顕在的な主語要素は、Agrs の Checking Domain において主格 (Nominative) を付与される)。(3b) において、

主語 NP (*a Bia*) は, Agrs の Checking Domain へ移動していない。よって, 当該 NP に主格が付与されない (当該用例の非文性)。 (3a) における主語 NP (*a Bia*) は, Agrs の Checking Domain に移動している。あるいは, 当該主語要素が Topicalization の適用を受け, Pol₁ (Pol₂) の Checking Domain へ移動している派生とも考えられる。⁵⁾

(1b) と (2b) が適格と予測される。(1b) と (2b) における主語 NP (*o Paulo, você*) は, Agrs の Checking Domain (Spec(Agrs)) にあると考えられる (定動詞は, Agrs 位置に生成される)。 [+wh] 要素 (*o que, quem*) は, AgrsP に左方付加した位置を経由する。つまり, ERM 違反が惹起することはない (後述するように, Pol₁ (あるいは Pol₂) に素性 [+Topic] が付与される派生もまた, 適格と予測される)。以下の (9b) の用例からも判明するように, 主語要素以外に対して Topicalization が適用された派生は, 不適格と判断される。

(9) a. *o que o Paulo comprou?* (Silva 1999: p.3, (5a))

‘ what did Paulo buy? ’

b. **o que ao Rafael fizeram?* (ibid.: p.29, fn.10)

what to Rafael did

‘ what did they do to Rafael? ’

c. *que idioma o Ivo ainda estuda no seu tempo livre?* (ibid.: p.19, (17c))

what language Ivo still studies in his free time

‘ what language does Ivo study still in his free time? ’

[+Topic] PP (*ao Rafael*) は, Pol₁' (Pol₂') に左方付加した位置へ移動する。 [+wh] 要素 (*o que*) と [+Topic] PP (*ao Rafael*) が Pol₁' (Pol₂') に左方付加した位置へ移動, あるいは經由するため, (9b) は不適格と予測される (ERM 違反)。 (9a) においては, このような ERM 違反が観察されない。

主語 NP (*a Paulo*) に素性 [+Topic] が付与される場合, (9a) は不適格と予測される。当該主語要素が Pol₁' (Pol₂') に左方付加した位置へ移動する。 [+wh] NP (*o que*) もまた, Pol₁' (Pol₂') に左方付加した位置を経由する (ERM 違反)。しかしながら, 同じ論法は, (9c) を不適格と予測する。この予測は, 事実に反する。 Adjunct (*ainda*) が, Agrs の Checking Domain に基底生成されると考えてみよう (定動詞 (*estuda*) が Agrs 位置に生起する点に留意されたい)。 その場合, 主語 NP (*o Ivo*) と [+wh] NP (*que idioma*) が AgrsP に左方付加した位置を経由する (ERM 違反)。 当該 Adjunct が Pol₁ (Pol₂) に左方付加した位置に基底生成されると考えた場合でも, (9c) が不適格と予測される。 Adjunct (*ainda*) が

Pol₂' に左方付加した位置に生成される派生で考える。[+Topic] NP (*o Ivo*) は , Agrs の Checking Domain を経由して , Pol₂' , あるいは Pol₁' に左方付加した位置へ移動する (Topicalization) 。 [+wh] NP (*que idioma*) もまた , Pol₁' と Pol₂' に左方付加した位置を経由して , ' の Checking Domain へ移動する。この派生は , ERM によって排除される。結果として , 主語要素 (*o Ivo*) に対する素性 [+Topic] 付与の有無に関係なく , (9c) が不適格と予測されることになる (問題点) 。ここで , [+definite] Subject に対する Topicalization について考える。前述のように , 本稿の仮説群は , (9c) を不適格と予測する。この問題を打開するために , 以下の (10) の用例にも検討を加える必要がある。Adjunct (*ainda*) の代わりに , Adjunct (*amiúde*) が生起する派生 (10b) が不適格と判断される。

- (10) a. *que medidas o governo toma amiúde?* (Silva 1999: p.98, (48a))
 what measures the government takes often
 b. **que medidas o governo amiúde toma?* (ibid.: (48b))
 ' what measures does the government often take? '

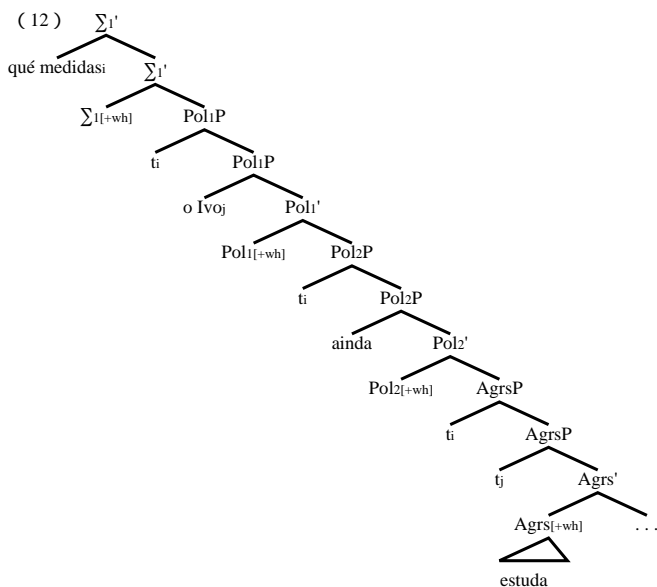
(9c) と (10b) の相違は , Adjunct (*ainda*, *amiúde*) の生成位置の相違と , [+definite] Subject に対して素性 [+Topic] が付与された場合の特殊性によって説明可能と思われる (この場合の素性を , [+definite-Subject-Topic] ([+dS-Topic]) と呼ぶ) 。具体的に , *ainda* タイプの Adjunct が Pol₁ (Pol₂) の Checking Domain に基底生成されると考える。*amiúde* タイプの Adjunct は , Agrs の Checking Domain に生成されると想定する。一方の Pol に素性 [+dS-Topic] が付与された場合 , 双方の Pol が PolP まで投射される旨の仮説 (11) を設定する。

- (11) Hypothesis for BP:
 Both Pol₁ and Pol₂ project to PolP, when the feature [+dS-Topic] is assigned to either of Pol₁ and Pol₂.

(10b) において , Adjunct (*amiúde*) は , Spec(Agrs) に生成される。素性 [+dS-Topic] を付与されない場合の主語 NP (*o governo*) は , AgrsP に左方付加した位置で移動を停止する。[+wh] NP (*que medidas*) もまた , AgrsP に左方付加した位置を経由する。この派生は , ERM によって排除される。素性 [+dS-Topic] を付与された主語要素もまた , AgrsP に左方付加した位置を経由して Pol の Checking Domain へ移動する。[+wh] 要素 (*que medidas*) が AgrsP に左方付加した位置を経由するため , この場合の派生もまた , ERM 違反を惹起する。結果と

して、(10b) に対して適切な派生を想定することはできない（不適格と予測される）。⁶⁾

一方、(9c) に対して適切な派生 (12) を想定可能である。素性 [+dS-Topic] が Pol₁ に付与され、Adjunct (*ainda*) が Pol₂ の Checking Domain (Spec(Pol₂)) に生成される派生である。主語 NP (*o Ivo*) は、Spec(Agrs) から一挙に Pol₁ の Checking Domain へ移動する。[+wh] NP (*o que*) は、Agrs, Pol₂ と Pol₁ の Checking Domain (それぞれの最大範疇に左方付加した位置) を経由して、₁ の Checking Domain へ移動する。この移動が、ERM 違反を惹起することはない。同様に、主語 NP (*o Paulo*) に素性 [+dS-Topic] が付与された派生としての (9a) が適格と予測される。⁷⁾



2. ポルトガル語における Focalization

BP における対応事象の検討に先立ち、European Portuguese (EP) での Focalization について考える (Focus 要素を大文字で表記する)。

(13) a. a Maria recomendou-me ESTES DISCOS (EP/*BP) (Kato & Raposo 1996: (3a))

Maria recommended-to me these records

b. ESTES DISCOS a Maria me recomendou (*EP/BP) (ibid.: (3b))

- these records Maria to me recommended
 ‘ it is these records that Maria recommended to me ’
 c. *ISSO eu lhe disse (Rouveret 1999: p.666)
 this I to him told
 d. ISSO lhe disse eu (ibid.)
 ‘ it is this that I told him ’

- (14) a. A SOPA, o Paulo comeu (Costa 1996: (5))
 the soup Paulo ate
 ‘ it is the soup that Paulo ate ’
 b. ?A VERDADE, o Pedro disse (Ambar 1992: p.77, (109c))
 the truth Pedro said
 ‘ it is the truth that Pedro said ’
 c. *EM LISBOA, o Pedro mora (ibid.: p.212, (85c))
 in Lisbon Pedro lives
 ‘ it is in Lisbon that Pedro lives ’

EP における Focalization をすべて同一の原理で説明することはできない。(13b-c) において, [Focus XP + Subject + 定動詞] の語順が排除される。一方, (14a-b) における同じ語順は, 許容される。少なくとも, 異なる話者グループの存在を想定する必要がある。(13b-c) が属すグループを EP-A グループと呼ぶ ((14a-b) のそれを EP-B グループと呼ぶ)。

ある素性に関する X⁰-Checking と XP-Checking に対して, 以下の規制 (15) を想定する (cf. Laenzlinger (1998: p.28))。移動先のゼロ範疇に付与される素性 Y と移動する要素がもつ素性 Y の一方, あるいは双方が Strong の場合, 統語移動 (S Movement) が発動する。双方の素性が Weak と指定された場合に限り, LF 移動が適用される。ポルトガル語の Focalization において, (15c,d) の可能性が追求される。

(15) Classification of checking patterns:

Target X ⁰ s Feature	Moved XP ⁱ s (Moved X ⁰ s) Feature
a. Strong	Strong Overt Movement (S Movement)
b. Strong	Weak Overt Movement (S Movement)
c. Weak	Weak Covert Movement (LF Movement)
d. Weak	Strong Overt Movement (S Movement)

以下の仮説 (16) を想定する。Focalization の適用を受ける最大範疇 (Focus Maximal Projection) は, 素性 [+FocusT] を付与される。Pol₁, あるいは Pol₂ に付与された素性 [+TopicFocus] は Weak と指定され, 順次 Agrs まで下方浸透す

る。素性 [+FocusT] の部分素性 [+Focus] は、ゼロ範疇 (Pol₁, Pol₂, Agrs) に付与・伝達された素性 [+TopicFocus] の部分素性 [+Focus] を Checking する。つまり, [+FocusT] XP は, Agrs の Checking Domain を経由して, Pol₂ (Pol₁) の Checking Domain へ移動することになる (最大範疇に付与された素性 [+FocusT] の部分素性 [+Focus] が Strong と指定された場合)。この部分素性が Weak と指定された場合, [+FocusT] XP の LF 移動が適用される (S 移動が適用されず, 当該 XP は, それが基底生成された位置にとどまる)。

(16) Hypotheses with respect to Focalization:

- A. The Focus maximal projection is assigned the feature [+FocusT] .
- B. The feature [+TopicFocus] assigned to Pol₁ or Pol₂, successively transmits/percolates down to Agrs.
- C. The feature [+TOPIC] and the feature [+TopicFocus] may not simultaneously be assigned to the same Pol₁ or Pol₂.

素性 [+FocusT] の部分素性 [+T (opic)] は, 常に Weak と指定される。よって, この部分素性 [+T (opic)] が [+FocusT] XP の S 移動の引き金になることはない。これにより, 素性 [+FocusT] の部分素性 [+Focus] が Weak と指定された場合の [+FocusT] XP の S 移動停止が説明される。前述のように, この部分素性 [+Focus] が Strong と指定される場合, [+FocusT] XP は S 移動する。この場合, [+T (opic)] に関する Checking は, ただ乗り (Free Riding) によって適用されると考える (この部分素性に関する Checking は, 適用されない (効力がない) と考える)。よって, Pol に付与された素性 [+TopicFocus] の部分素性 [+Topic] に関する Checking が発動しない。この場合, 定動詞に付与される Strong と指定された素性 [+topic] によって, この部分素性 [+Topic] に関する Checking が適用されることになる。⁸⁾

EP と BP の双方において, 定動詞は Agrs に生成される (Agrs の V 素性が Strong と指定される)。Focalization において, 定動詞に X⁰ 素性 [+Topic] が付与されると考える (この素性を [+topic] と表示する)。素性 [+topic] が Strong と指定される場合, 定動詞もまた, Agrs に左方付加した位置を経由して, 素性 [+TopicFocus] を付与・伝達された Pol₂ (Pol₁) に左方付加した位置へ主要部移動する。この素性 [+topic] が Weak と指定された場合, 定動詞は Agrs 位置においてその主要部移動を停止する。素性 [+TOPIC] と素性 [+TopicFocus] が同一の Pol に付与されることはない。

2.1 EP-A グループにおける Focalization

EP-A グループにおいて, [Focus XP + Subject + V] の語順は許容されない。(13b) の用例で, 検討する。通例, EP-A の Pol は, Pol' まで投射される。素性 [+TopicFocus] が Pol₁ に付与される派生で考える。Pol₁ に付与された素性 [+TopicFocus] は, 順次 Agrs まで下方浸透する。Focus NP (*estes discos*) に付与された素性 [+FocusT] の部分素性 [+Focus] が Strong と指定される (当該要素の S 移動が発動する)。当該 Focus NP は, Agrs と Pol₂ の Checking Domain を経由して, Pol₁' に左方付加した位置へ移動する。Pol₂ に素性 [+TOPIC] が付与される。NP (*a Maria*) に付与された素性 [+TOPIC] もまた, Strong と指定される。[+TOPIC] NP (*a Maria*) は, Pol₂' に左方付加した位置へ移動する (EP-A において, 素性 [+dS-TOPIC] を付与された Pol は Pol' まで投射される)。この移動は, ERM によって排除される。素性 [+TOPIC] が Pol₁ に付与される可能性はない ((16C))。つまり, (13b-c) が不適格と予測される。

それでは, (13b) に対応する適切な派生が存在しないのか。少なくとも, 上で観察された ERM 違反を回避する Strategy が存在する。一つは, [+FocusT] の部分素性 [+Focus] が Weak と指定される派生である。一つは, NP (*a Maria*) に素性 [+TOPIC] が付与されない派生である (XP に付与された素性 [+TOPIC] は, 常に Strong と指定される)。前者の派生は, (13a) を生成する (当該用例が, 適格と予測される)。後者の派生は, 以下の (17a) を生成する。 (17a) の適格性は, (13d) によって例証される。主語 NP (*a Maria*) に素性 [+TOPIC] が付与されないため, 当該要素の左方移動が発動しない (当該主語 NP は, それが基底生成された位置にとどまる)。前述のように, BP において, 主語 NP 要素が基底生成された位置にとどまることはない。一方, EP では, この可能性が存在する (スペイン語の場合と同様に)。⁹⁾

- (17) a. ESTES DISCOS me recomendou a Maria
 b. *ESSES LIVROS leu o João (Raposo 1998: fn.3)
 those books read João
 ' It is those book that João read '

前述のように, [+FocusT] の部分素性 [+Focus] は Strong, あるいは Weak と指定される。それでは, (17b) の非文性は何を物語るのか。これは, ある特定の条件下で, 素性 [+FocusT] の部分素性 [+Focus] が常に Weak と指定される下位グループの存在を予想させる。よって, この下位グループにおいて, (17a)

は不適格と予測されることになる（未検証）。

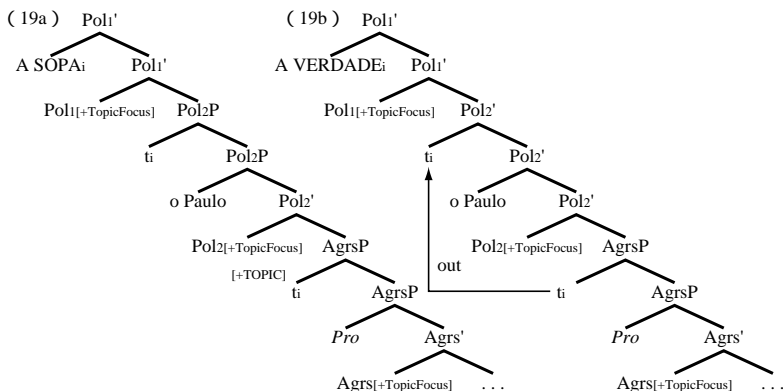
2.2 EP-B グループにおける Focalization

(13b) の非文性を説明する論法は、(14a-b) を不適格と予測する（問題点）。(14a-b) は、適格と判断される。(14a) の適格性について考える。BP の素性 [+dS-TOPIC] に関する仮説 (11) に類似する仮説 (18A) を設定する。素性 [+dS-TOPIC] を付与された Pol のみが PolP まで投射されるグループの存在が想定される。

(18) Hypothesis:

- A. In EP-B (1), one sub-group of EP-B, Pol₁ or Pol₂, assigned the feature [+dS-TOPIC], projects to PolP.
- B. In EP-B (2), the other sub-group of EP-B, antecedent-government requirement for the inner-argument [+FocusT] XP is replaced by Binding.

最初に、EP-B (1) における派生に検討を加える。(14a) において、素性 [+FocusT] の部分素性 [+Focus] が Strong と指定される。素性 [+TopicFocus] が Pol₁ に付与され、Pol₂ に素性 [+TOPIC] が付与される。(Pol₂ が Pol₂P まで投射される)。主語 NP (*o Paulo*) は、それが基底生成された位置から一挙に Spec (Pol₂) へ移動する。Focus NP (*a sopa*) は、AgrsP と Pol₂P に左方付加した位置を経由して、Pol₁' に左方付加した位置へ移動する。この移動が、ERM に抵触することはない。定動詞に付与される素性 [+topic] は、Weak と指定される。つまり、定動詞 (*comeu*) は、Agrs 位置にとどまる。結果として、(14a) が適切に生成される（派生構造 (19a)）。



EP-B (1) の用例を説明する論法は, (14b-c) を適格と予測する。実際には, (14c) が不適格判断される。この問題は, (14b-c) の用例が, EP-B (2) に属すると考えることにより打開される。EP-B (2) において, (18B) が適用される ((18A) は, 適用されない)。素性 [+TOPIC] が付与された場合でも, Pol が Pol' まで投射される。(14b) に対応する派生構造 (19b) において, 矢印で示した移動は, ERM によって排除される (定動詞に付与される素性 [+topic] が Weak と指定されるため, 定動詞は Agrs 位置にとどまる)。内項 (Inner-Argument) に対する先行詞統率要件が束縛 (Binding) によって代替される。結果として, (14b) は, 適格と予測される。Adjunct (*em Lisboa*) が内項でないため, Binding による代替は適用されない。つまり, (14c) は, ERM によって排除される。¹⁰⁾

2.3 BP における Focalization

(13a-b) で考える (当該用例を, (20a-b) として再掲する)。BP において, [+FocusT] XP は, 定動詞の左方に生起する (Kato & Raposo (1996: p.268))。つまり, [+FocusT] の部分素性 [+Focus] が Strong と指定される。結果として, (20a) は, 不適格と予測される。¹¹⁾

定動詞に付与される素性 [+topic] が Strong と指定されると想定する (これに関する論考は, 本稿第3節でなされる)。よって, 定動詞は, 素性 [+TopicFocus] が付与された Pol 位置まで移動することになる。前述のように, 一方の Pol に素性 [+dS-TOPIC] が付与された場合, 双方の Pol が PolP まで投射される (仮説 (11))。EP の用例である (14a-c) と異なり, [+FocusT] XP と主語 NP 間に休止 (コンマ) が生起する必要がない。つまり, [+FocusT] XP と主語 NP が同一範疇の Checking Domain 内部にあると考えられる (cf. Ambar (1999: p.34))。換言すれば, 本稿の仮説 (16C) が BP に適用されないと考えられる。これまで設定された Parameter と Parameterization のそれぞれを (21) と (22) として再掲する。

(20) a. a Maria recomendou-me ESTES DISCOS (EP/*BP) (Kato & Raposo 1996: (3a))

Maria recommended-to me these records

b. ESTES DISCOS a Maria me recomendou (*EP/BP) (ibid.: (3b))

these records Maria to me recommended

c. ESTES DISCOS me recomendou a Maria

' it is these records that Maria recommended to me '

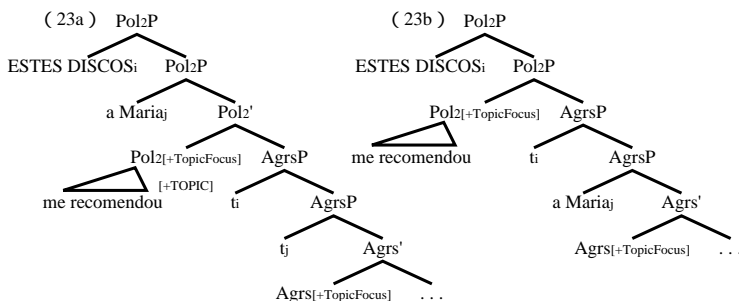
(21) Parameters:

- A. Both Pol₁ and Pol₂ project to PolP, when the feature [+dS-TOPIC] is assigned to either of Pol₁ and Pol₂.
- B. The feature [+TOPIC] and the feature [+TopicFocus] may not simulatenously be assigned to the same Pol₁ or Pol₂.
- C. In EP-B (1), one sub-group of EP-B, Pol₁ or Pol₂, assigned the feature [+dS-TOPIC] , projects to PolP.
- D. In EP-B (2), the other sub-group of EP-B, antecedent-government requirement for an inner-argument [+FocusT] XP is replaced by Binding.

(22) Parameterization:

	Parameter A	Parameter B	Parameter C	Parameter D
EP-A	-	+	-	-
EP-B (1)	-	+	+	-
EP-B (2)	-	+	-	+
BP	+	-	(+)	-

素性 [+TOPIC] と素性 [+TopicFocus] が Pol₂ に付与される派生で考える。主語 NP (*a Maria*) は , Spec(Agrs) を経由して , Spec(Pol₂) へ移動する。 [+FocusT] NP (*estes discos*) は , AgrsP に左方付加した位置を経由して , Pol₂P に左方付加した位置へ移動する。この移動が , ERM によって排除されることはない。結果として , BP の用例 (20b) に対して , 適切な派生 (23a) が想定されることになる。¹²⁾



主語 NP (*a Maria*) に素性 [+TOPIC] が付与されない場合 , 派生構造 (23b) に対応する (20c) の派生が生成される (BP において , 顕在的な主語要素が Agrs の Checking Domain へ移動する必要がある点に留意されたい) 。 よって , (20c) もまた , 適格と予測される。

3. EP における Wh Interrogative と Informational Focus Strategy

本稿の目標は、BP- グループの用例 (1) と BP- グループのそれである (2) との相違を説明することであった。これに先立ち、EP における Wh 疑問文 (Interrogative) に分析を加える。さらに、Wh 疑問文に対する返答文を構成する Informational Focus Strategy が BP に存在しない点を確認する (EP には、当該 Strategy が存在する)。

3.1. EP における Wh Interrogative

以下の用例からも判明するように、Simple Wh 要素が生起する用例における [[+wh] XP + Subject + V] の語順は不適格と判断される。一方、Complex Wh 要素 (D (discourse) -Linked Wh 要素) の場合には、この語順が許容される。D-Linked Wh 要素が生起する場合、[[+wh] XP + Subject + V] の語順が不適格と判断される話者グループの存在も確認される ((26), (27))。

Focalization に関して、EP は EP-A, EP-B (1) と EP-B (2) の話者グループに分類された。同様に、Wh Interrogative に関して、少なくとも 3 種の話者グループの存在が確認される (これらのグループを、EP- , EP- と EP- と呼ぶことにする)。Ambar (1992), Kato & Raposo (1996) と Rouveret (1999) が属すと考えられる EP- において、D-Linked Wh 要素が生起する場合の [[+wh] XP + Subject + V] の語順が許容される。Brito & Pereira (1974), Teyssier (1984) と Barbosa (1995) が属すと考えられる EP- では、Wh 要素の類別に関係なく、[[+wh] XP + Subject + V] の語順が排除される。Costa (1996) が属す EP- では、Topicalization の適用を受けた主語 NP が [+definite] である場合の [D-Linked [+wh] XP + Subject + V] の語順のみが許容される (その他の場合は、不適格と判断される)。¹³⁾

(24) EP-

- a. *que a Maria comprou? (Ambar 1992: p.28, (5b))
what Maria bought ' what did Maria buy? '
- b. *onde o João pôs os quadros? (ibid.: p.58, (9b))
where João put the paintings ' where did João put the paintings? '
- c. *porque a Rita saiu? (ibid.: p.58, (10b))
why Rita went out ' why did Rita go out? '

(25) EP-

- a. que livro a Maria comprou? (Ambar 1992: p.28, (7))
which book Maria bought ' which book did Maria buy? '

- b. ?em que galeria o João pôs os quadros? (ibid.: p.60, (23b))
 to which gallery did Joao put the paintings ' to which gallery did João put the paintings? '
 c. ?por que razão a Rita saiu? (ibid.: p.60, (25b))
 for which reason Rita went out ' which reason did Rita go out for? '

(26) EP-

- a. *o que o João comeu? (Brito & Pereira 1974: p.220, (3))
 what João ate ' what did João eat? '
 b. *que livro tu estás a ler? (ibid.: (11))
 which book you are reading ' which book are you reading? '

(27) EP-

- a. que livro o Paulo leu? (Costa 1996: (4a))
 which book Paulo read? ' which book did Paulo read? '
 b. *que o Paulo leu? (Costa (p.c.))
 ' what did Paulo read? '
 c. *que livro um homem leu? (Costa 1996: (9a))
 which book a man read? ' which book did a man read? '
 d. *que um homem leu?
 ' what did a man read? '

上で確認された Wh 要素移動に関する 3 種のグループ存在は，以下の Parameter によって説明可能と考えられる。

(28) Parameters:

- A. Pol₁ or Pol₂, assigned the feature [+dS-TOPIC] projects to PolP.
 B. Antecedent-government requirement for a D-Linked [+wh] element is replaced by Binding.

(29) Parameterization:

	EP-	EP-	EP-
Parameter A	-	+	-
Parameter B	+	-	-

EP- の用例 (24a) は，ERM によって排除される。当該グループにおいて，Parameter (28A) が [-] と表示される (Parameter (28B) は，[+] と指定される)。 ₁ に付与された素性 [+wh] が，順次 Agrs まで下方浸透する。素性 [+TOPIC] が Pol₁ (Pol₂) に付与される。Simple [+wh] NP (*que*) と [+TOPIC] NP (*a Maria*) が，Pol₁' (Pol₂') に左方付加した位置へ移動・経由する。D-Linked [+wh] NP (*que livro*) が生起する場合，この ERM 違反が回避される (Binding による代替)。EP- の用例 (26a-b) は，ERM によって排除され

る。

同様の論法は、EP- の用例 (27c-d) を不適格と予測する。(27a-b) は、共に適格と予測される。実際には、(27b) は不適格と判断される (問題点)。

この問題は、本稿の最終目標である (1a) と (2a) の相違を説明する論法と密接に関係する。次の Sub-Section において、BP における Informational Focus Strategy について考える。

3.2. BP における Informational Focus Strategy

以下の相違に着目する (Informational Focus Stress を付与される最大範疇を x_p と表記する)。ロマンス語において、Wh Interrogative に対する返答文は、通例 Informational Focus Strategy によって構成される。この点で、EP は他のロマンス語と並行する挙動をとる。BP では、この Strategy が発動していないと考えられる。Informational Focus Stress (IF Stress) を付与される要素は、それが基底生成された位置でこの Stress を付与される。Informational Focus 要素は、Stress 領域内において最も深く埋め込まれた位置に生成される必要がある (cf. Cinque (1993))。¹⁴⁾

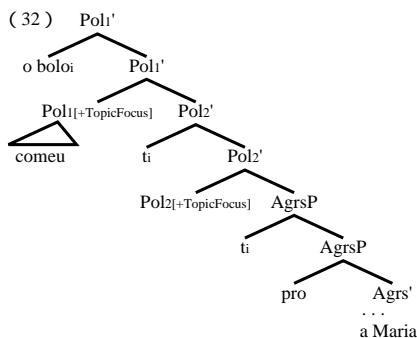
- (30) a. quem comeu o bolo? (EP/BP) (Kato & Raposo 1996: (1a))
 who ate the cake 'who ate the cake?'
 b. (o bolo) comeu a Maria (EP/*BP) (ibid.: (1b))
 c. (o bolo) a Maria comeu (*EP/BP) (ibid.: (1c))
 ' Maria ate the cake '
- (31) a. quanto custou o seu carro? (EP/BP) (Kato & Raposo 1996: (2a))
 how much cost your car 'how much did your car cost?'
 b. (o carro) custou-me cinco mil dolares (EP/*BP) (ibid.: (2b))
 c. cinco mil dolares me custou o carro (*EP/BP) (ibid.: (2c))
 ' the car cost me 5000\$ '

EP の用例としての (30), (31) は、問題なく説明される。(30b) と (31b) のそれぞれにおいて、IF Stress を付与される NP (*a Maria, cinco mil dolares*) は、基底生成された位置 (VP 内部) にとどまっている。つまり、(30b) と (31b) が適格と判断される。(30c) と (31c) における NP (*a Maria, cinco mil dolares*) は、それが基底生成された位置から他の位置へ移動している。結果として、(30c) と (31c) が不適格と判断されることになる。

IF Strategy は、どのようなプロセスによって発動するのか。(Contrastive)

Focus Strategy の場合に類似するプロセスが想定される。素性 [+TopicFocus] が Pol₁ (Pol₂) に付与される。Pol₁ (Pol₂) に付与された当該素性は、順次 Agrs まで下方浸透する。前述のように、IF Stress を付与される要素は、それが基底生成された位置にとどまる。それでは、いかなるプロセスによって、IF Stress を付与されない要素、例えば (30b) と (31b) のそれぞれにおける NP (*o bolo, o carro*) が左方移動するのか。Ambar (1999) に従って、左方移動する NP (*o bolo, o carro*) に素性 [+TopicFocus] が付与され则认为する。(Contrastive) Focus Strategy の場合と異なり、定動詞に素性 [+focus] が付与され则认为する (素性 [+focus] が Strong と指定される)。よって、定動詞は、素性 [+TopicFocus] を直接付与された Pol 位置まで主要部移動する。

(30b) に対応する派生構造 (32) で考える。[+TopicFocus] が Pol_i に付与される派生で考える (当該素性は、順次 Agrs まで下方浸透する)。定動詞は、Pol₂ の Checking Domain を經由して、Pol_i に左方付加した位置へ移動する。[TopicF] NP (*o bolo*) は、AgrsP と Pol₂' に左方付加した位置を經由して、Pol_i' に左方付加した位置へ移動する (当該 NP_i に対応する空の Operator (OP_i) が移動する場合もある)。結果として、(30b) が適格と予測される。素性 [+TopicF] が Pol₂ に付与される派生もまた、適格と予測される。(30c) は生成不能として、不適格と予測される。



さらに、素性 [+TopicF] の部分素性 [+Topic] だけでなく、素性 [+TOPIC] が関与すると思われる事例もある。素性 [+TopicF] と [+TOPIC] ([+dS-TOPIC]) が同一の Pol に付与されることはないと考える。

(33) a. a quem ofereceu o Pedro as flores? (Ambar 1999: (24))

- to whom offered Pedro the flowers
 ' whom did Pedro offer the flowers to? '
 b. ofereceu à Joana (ibid.: (25a))
 c. o Pedro as flores ofereceu à Joana (ibid.: (25b))
 d. as flores o Pedro ofereceu à Joana (ibid.: (25c))
 e. o Pedro ofereceu as flores à Joana (ibid.: (25d))
 f. as flores ofereceu o Pedro à Joana (ibid.: (25e))
 ' Pedro offered the flowers to Joana '

(33c)において、主語 NP (*o Pedro*) と Pol₁ に素性 [+dS-TOPIC] が付与される。当該主語要素は、一挙に Pol₁' に左方付加した位置へ移動する。Pol₂ に付与された素性 [+TopicF] が Agrs まで下方浸透する (定動詞は、Pol₂ 位置に生成される)。[+TopicF] NP (*as flores*) が Agrs の Checking Domain を経由して、Pol₂' に左方付加した位置へ移動する。この派生が、ERM によって排除されることはない (適格と予測される) (Ambar (1992, 99) において、[+dS-TOPIC] を付与された Pol が Pol' まで投射される点に留意されたい)。 (30d) において、[+TopicF] NP (*o Pedro*) は、Agrs の Checking Domain を経由して、Pol₂' に左方付加した位置へ移動する。[+TOPIC] NP (*as flores*) は、それが生成された位置から、一挙に Pol₁' に左方付加した位置へ移動する。つまり、(33d) は、適格と予測される。 (33e, f) は、それぞれ主語 NP (*o Pedro*) と DO NP (*as flores*) に素性 [+TopicF] が付与される派生として説明される (素性 [+TOPIC] が関与しない)。この場合、(33e) の DO NP (*as flores*) に Scrambling が適用されると考える必要がある (Scrambling による移動に関しては、稿を改める)。 ¹⁵⁾

IF Stress を付与される要素は、それが基底生成された位置にとどまる。よって、BP の用例としての (30b-c) と (31b-c) を、IF Strategy が適用された事例と考えることはできない。例えば、(30c) と (31c) において、IF Stress を付与された要素が定動詞の左方に生起する。 (20a, c) と (31b, c) との並行性に留意されたい。ここで、BP における IF Strategy が、(Contrastive) Focus Strategy によって代替されると考える。つまり、(31b-c) は、(34b-c) として実現されることになる。

- (34) a. quanto custou o seu carro? (EP/BP)
 ' how much did your car cost? '
 b.* (o carro) custou-me CINCO MIL DOLARES
 b'.* (o carro) me custou CINCO MIL DOLARES
 c. CINCO MIL DOLARES me custou o carro
 ' the car cost me 5000\$ '

- d. CINCO MIL DOLARES o carro me custou
e. o carro CINCO MIL DOLARES me custou

BP において、素性 [+FocusT] の部分素性 [+Focus] が Strong と指定される。よって、(34b-b') は、生成不能となる。BP における顕在的な主語要素は、少なくとも Agrs の Checking Domain へ移動する必要がある (Case Filter)。 (34c) の適格性は、定動詞 (*me custou*) が Agrs よりも上位のゼロ範疇へ移動することを物語る。これは、定動詞に付与される素性 [+topic] が Strong と指定されることにより導出される (定動詞は、Agrs に左方付加した位置を経由して、Pol 位置へ主要部移動する)。素性 [+dS-TOPIC] が付与される場合、 (34d-e) もまた適格と予測される ((34d) の適格性は、本稿の (13b) によって例証される)。

3.3. (1a) vs. (2a)

(1) と (2) を、 (35) と (36) として再掲する。

(35) BP-

- a. *o que comprou o Paulo? (Silva 1999: p.3, (5b))
what bought Paulo
b. o que o Paulo comprou? (ibid.: (5a))
' what did Paulo buy? '

(36) BP-

- a. que diz a senhora? (Gartner 1994: p.264)
what says the lady (you)
' what do you say? '
b. quem você viu? (Gartner 1998: p.641)
whom you saw
' whom did you see? '

Wh Movement において、定動詞は Agrs 位置に生成される。よって、 (35a) における主語 NP (*o Paulo*) に格 (Nominative) が付与されない。つまり、 (35a) は、非文と予測される。同じ論法は、 (36a) を不適格と予測する (問題点)。換言すれば、何らかのプロセスによって、 (36a) における主語 NP (*a senhora*) は、格 (Nominative) を付与されることになる。 (36a) における主語 NP (*a senhora*) が Agrs の Checking Domain に生起すると考えた場合、当該用例が適格と予測されることになる。ここで、以下の仮説を設定する。IF Strategy が Focus Strategy

によって代替されるのと同様に、Wh-Movement Strategy が Focus Strategy によって代替されを考える。

(37) Hypothesis:

In BP- , a Wh-movement strategy may be replaced by a (contrastive) focus strategy.

(36a)において、素性 [+wh] が関与することはない。Pol₁ (Pol₂) に付与された素性 [+TopicFocus] は、順次 Agrs まで下方浸透する。Wh 要素 (*que*) に素性 [+Focus] が付与される。当該素性の部分素性 [+Focus] が Strong と指定される。定動詞に付与される素性 [+topic] もまた、Strong と指定される (定動詞は、Pol 位置に生成される)。よって、主語 NP (*a senhora*) が Agrs の Checking Domain に生起する派生が想定される。換言すれば、当該主語に格 (Nominative) が付与される。つまり、本稿の (20c) を説明する論法によって、(36a) は適格と予測される。同様の論法により、(36b) は適格と予測される。通常の Wh-Movement Strategy が発動した場合にも、(36b) は適格と予測される。以下の用例から、D-Linked Wh 要素が生じた場合でも、Focus Strategy による代替が適用されることが判明する。

(38) BP-

qual dessas dunas galgou Tieta na distante tarde ...? (Gärtner 1998: p.641)

which of these dunes climbed up Tieta on the evening of such a far-off day

' which of these dunes did Tieta climb up on the evening of such a far-off day ...? '

4. 結びと補遺

以下の用例 (39) は、問題を惹起する。当該用例が、BP- と BP- のどちらにも属さないように思われる。(39a) と (39c) の相違が問題となる。Kato & Raposo (1996: p.272) は、(39a-b) における主語 NP (*o (seu) carro*) が基底生成された位置に生起するのではなく、右方転移 (Right Dislocation) の適用を受けていると指摘する。この論法によれば、(39c) における主語 NP (*a Maria*) は、Right Dislocation の適用を受けないことになる。この Right Dislocation の適用条件が不分明である。

(39) BP

a. quanto custou o seu carro? (Kato & Raposo 1996: (2a))

' how much did your car cost? '

b. CINCO MIL DOLARES me custou o carro (ibid.: (2c))

- ‘ the car cost me 5000\$ ’
 c.*que CDs me recomendou a Maria? (ibid.: (6a))
 d. que CDs a Maria me recomendou? (ibid.: (6b))
 ‘ which CDs did Maria recommend to me? ’

本稿では、この問題が D-Linked Wh 要素と Simple Wh 要素の類別によって説明可能であると考ええる。この点で、EP- グループの用例である (40) と (41) の用例が興味深い。本稿の仮説群は、(40b) を適格と判断する (問題点)。 (39) で観察された問題と、(40b) が提起する問題は、類似する Strategy によって説明されると思われる ((39) の判断を示すグループを BP- と呼ぶ)。

(40) EP-

- a. que livro o Paulo leu? (Costa 1996: (4a))
 b.*que o Paulo leu? (Costa (p.c.))
 ‘ which book did Paolo read? ’
 c. que leu o Paulo?
 ‘ what did Paulo read? ’

(41) EP-

- a.*que livro un homem leu? (Costa 1996: (9a))
 b.*que un homem leu?
 ‘ which book/what did a man read? ’

(39) において、Simple Wh 要素が生起する場合の Wh-Movement Strategy が (Contrastive) Focus Strategy によって代替可能と考える (D-Linked Wh 要素が生起する場合の Wh-Movement Strategy が Focus Strategy によって代替されることはない)。これにより、(39a) と (39c) の相違が説明される。(39a) において、Focus Strategy が発動する。Pol₁ (Pol₂) に付与された素性 [+TopicFocus] が順次 Agrs まで下方浸透する。Wh 要素に、素性 [+FocusT] が付与される。この Wh 要素は、素性 [+TopicFocus] が付与された最上位の Pol の Checking Domain へ移動する。定動詞に付与される素性 [+topic] が Strong と指定される。よって、定動詞は Agrs の Checking Domain を経由して、素性 [+TopicFocus] が付与された最上位の Pol へ移動する。つまり、主語 NP (*o seu carro*) が Agrs の Checking Domain に生起する派生が想定可能となる。一方、D-Linked Wh 要素が生起する (39c) では、Focus Strategy による代替が適用されない (定動詞は、Agrs 位置に生成される)。結果として、主語 NP (*a Maria*) に格 (Nominative) が付与されない (不適格と予測される)。

(42) Hypothesis for BP- :

Replacement of a Wh-movement strategy by a focus strategy is limited to a simple wh-element.

(43) Hypothesis for BP- :¹⁶⁾

A. In a simple Wh-interrogative, replacement by a focus strategy applies obligatorily.

B. In replacement by a focus strategy, the feature [+topic] assigned to the finite verb is specified as strong.

EP- グループの用例 (40b) の非文性は、仮説 (43) によって説明される。EP- において、Simple Wh 要素が生起する Interrogative は、Focus Strategy によって実現される (義務的適用)。当該グループを含む EP 全体において、素性 [+TopicFocus] と [+dS-TOPIC] が同一の Pol に付与されることはない (Parameter (21B)) (EP- は、EP-B (1) に対応すると考えられる)。 (40b) において、素性 [+TopicFocus] は、Pol₁ に付与される。素性 [+dS-TOPIC] が Pol₂ に付与される。Wh 要素 (*que*) は Pol₂ の Checking Domain を経由して、Pol₁' に左方付加した位置へ移動する。 [+dS-TOPIC] NP (*o Paulo*) は、一挙に Spec (Pol₂) へ移動する。定動詞は、Pol₁ に生成される。結果として、 (40b) は、生成不能となる。適切に生成されるのは、 (40c) である。 (40c) に対して、素性 [+dS-TOPIC] が関与しない派生、つまり、主語 NP (*o Paulo*) が基底生成された位置にとどまる派生を想定することはできない。¹⁷⁾

本稿では、BP における Interrogative の派生構造に検討を加えられた。当該事象は、ERM (Extended Relativized Minimality) 基づく仮説と種々のパラメーターによって説明可能であることが示された。更なる用例の分析により、本稿で設定された仮説群の修正・破棄が必要であることは言うまでもない。

[補遺 1] Copula Deletion

最初に、Kato & Raposo (1996) が BP 特有であるとして提示する用例 (44) に初歩的な論考を加える。当該用例において、C が語彙的に *que* として実現される。

Kato & Raposo (1996) は、 (44a-c) が、対応する完全な分裂 (Cleft Sentence) である (46a-c) における Focus 要素と Wh 要素の左方移動によって派生する構造 (45a-c) に由来すると考える。さらに、BP に特有と想定される Copula (*é*) の Deletion が (45a-c) 適用され、 (44a-c) が生成すると考える。 (44a-c) において、C (*que*) の削除も可能であると指摘する (Kato & Raposo (1996: p.274))。

(44) a. A MARIA (que) me deu o CD (*EP/BP) (Kato & Raposo 1996: (16a) (17a))

Maria that to me gave the CD ' it is Maria that gave me the CD '

b. O CD (que) a Maria me deu (*EP/BP) (ibid.: (16b) (17b))

the CD that Maria to me gave ' it is the CD that Maria gave to me '

c. quem (que) me deu o CD? (*EP/BP) (ibid.: (16c) (17c))

who that to me gave ' who is it that gave me the CD? '

(45) a. A MARIA é que me deu o CD (EP/BP) (Kato & Raposo 1996: (15a))

' it is Maria that gave me the CD '

b. O CD é que a Maria me deu (EP/BP) (ibid.: (15b))

' it is the CD that Maria gave to me '

c. quem é que me deu a CD? (EP/BP) (ibid.: (15c))

' who is it that gave me the CD? '

(46) a. foi A MARIA que me deu o CD (EP/BP) (Kato & Raposo 1996: (13a))

' it was Maria that gave me the CD '

b. foi O CD que a Maria me deu (EP/BP) (ibid.: (13b))

' it was the CD that Maria gave to me '

[c. foi quem que me deu a CD?] (ibid.: (13c))

' who was it that gave me the CD? '

この説明法は、BP の用例としての (47a-b) を適格と予測する。上のプロセス (特に、Copula Deletion) が EP に適用されないと前提されるため、*que* が生起しない EP の用例としての (47a-b) は、不適格と予測されることになる。既に述べたように、EP-B の用例としての (47a) は、適格と判断される。EP-B において、Focus 要素の右方における [Subject + V] の語順が許容される。さらに、*que* が生起しない場合、D-Linked Wh 要素が左方移動する派生における [Subject + V] の語順が許容される EP グループが存在する。つまり、Kato & Raposo (1996) の説明法は、重大な問題を内包するものである。

(47) a. O CD (que) a Maria me deu (*EP/BP) (Kato & Raposo 1996: (16b) (17b))

b. a quem (que) a Maria deu o bolo (*EP/BP) (ibid.: (10c))

仮に、以下のように考える。BP に対して、₁ に付与された素性 [+wh] が直接上位の C まで上昇浸透するプロセスを想定する。同様に、Pol₁ (Pol₂) に付与された素性 [+TopicFocus] の部分素性 [+Focus] が C まで上昇浸透するプロセスを想定する。C に素性 [+wh]、あるいは素性 [+TopicFocus] の部分素性 [+Focus] が上昇浸透した場合に限り、C が *que* として実現される可能性があると考え (Root Context において)。

(47a)において, Pol₁ (Pol₂) に付与された素性 [+TopicFocus] の部分素性 [+Focus] が, C まで上昇浸透する (定動詞は, 素性 [+TopicFocus] が直接付与された Pol 位置に生成される)。素性 [+dS-TOPIC] が付与された主語 NP (*a Maria*) もまた, Pol₁ (Pol₂) の Checking Domain へ移動する (BP において, Pol₁ と Pol₂ の双方が PolP まで投射され, 素性 [+TopicFocus] と [+dS-TOPIC] が同一の Pol に付与可能である)。[+FocusT] NP (*o CD*) は, 素性 [+TopicFocus] が付与された Pol と ₁ の Checking Domain を経由して, Spec(C) へ移動する (BP において, 素性 [+FocusT] の部分素性 [+Focus] と定動詞に付与される素性 [+topic] が Strong と指定される点に留意されたい)。この派生は, ERM によって排除されることはない。同様に論法により, (47b) もまた, 適格と予測される。¹⁸⁾

以下の (48a) の適格性もまた, 部分素性 [+Focus] の上昇浸透によって説明される。(49a-b) で示されるように, Adjunct (*provavelmente*) は, Pol₁ (Pol₂) の Checking Domain に基底生成される ((49a) における当該 Adjunct は, 左方転移 (Left Dislocation (LD)) の適用を受けた位置に基底生成されるとも考えられる。(49c) は, 当該 Adjunct が Agrs よりも下位にある範疇内部に生成される可能性を示す)。 *ninguém* のような否定極性表現 (Negative Polarity Item (NPI)) の左方移動が発動する場合, Pol₁ (Pol₂) に素性 [+neg(ation)] が付与されると考える (当該素性 [+neg] は, 少なくとも Agrs まで下方浸透すると考えられる)。(48b) は, 不適格と予測される。素性 [+neg] が Pol₁ に付与され, Adjunct (*provavelmente*) が Pol₂ の Checking Domain 内に基底生成される派生で考える。NPI NP (*ninguém*) が, Pol₂' に左方付加した位置を経由して, Pol₁ の Checking Domain へ移動する (Pol が Pol' まで投射される点に留意されたい)。つまり, ERM 違反が惹起する。Adjunct (*provavelmente*) がその Checking Domain 内に基底生成される Pol と素性 [+neg] が付与される Pol が同一である派生もまた, ERM によって排除される。(48c) の適格性は, Adjunct (*provavelmente*) が Pol₁' に左方付加した位置に生成され, 素性 [+neg] が Pol₂ に付与された派生として説明される (適格と予測される)。Adjunct (*provavelmente*) に LD が適用された派生としても説明される (LD の適用を受けた要素は, C の Checking Domain に生成される)。

(48) a. NINGUÉM provavelmente telefonará às 5 (BP) (Silva 1999: p.84, (36a))

nobody probably will telephone at five

b.*ninguém provavelmente telefonará às 5 (BP) (ibid.: 36b))

c. provavelmente ninguém telefonará às 5 (BP) (ibid.: 36c))

‘ nobody will probably telephone at five ’

d. JOÃO provavelmente tinha errado (BP) (ibid.: p.85)

‘ JOÃO had probably made a mistake ’

(49) a. provavelmente João tinha errado (BP) (Silva 1999: p.84, (35a))

b. João provavelmente tinha errado (BP) (ibid.: 35b))

c. João tinha provavelmente errado (BP) (ibid.: 35c))

‘ João had probably made a mistake ’

(48a) の適格性が物語るように, NPI NP (*ninguém*) に Focus Stress が付与された派生は適格と判断される。この適格性は, NPI NP (*ninguém*) に素性 [+neg] の代わりに, 素性 [+FocusT] が付与された派生として説明される (NPI 要素に対する Light Dislocation の適用は排除される)。Adjunct (*provavelmente*) は, Pol₂' に左方付加した位置に基底生成される。素性 [+TopicFocus] が同じ Pol₂ に付与される派生は, ERM によって排除される ([+FocusT] である NPI NP (*ninguém*) が, Pol₂' に左方付加した位置を経由する)。定動詞に付与された素性 [+topic] が Strong と指定されると想定した場合, Pol₁ に付与された素性 [+TopicFocus] の部分素性 [+Focus] が上昇浸透する派生は, 生成不能となる。これは, 定動詞が, Pol₁ 位置に生成されるためである。註(18)で述べたように, 素性 [+TopicFocus] の部分素性 [+Focus] が上昇浸透する派生では, 定動詞に付与される素性 [+topic] が Weak と指定されると想定する必要がある。結果として, (48a) が ERM によって排除されることはない (適格と予測される)。これは, (48d) によっても例証される。¹⁹⁾

Silva (1999) が属すと考えられる BP- において, ₁ に付与された素性 [+wh] の上昇浸透が適用されると考えることはできない (用例 (48) の検討で述べたように, Pol に付与された素性 [+TopicFocus] の部分素性 [+Focus] の上昇浸透は発動する)。これは, 本稿の (10a-b) と (9b) によって例証される (これらの用例を, (50a-c) として再掲する)。

(50) a. que medidas o governo toma amiúde? (Silva 1999: p.98, (48a))

b.*que medidas o governo amiúde toma? (ibid.: (48b))

‘ what measures does the government often take? ’

c.*o que ao Rafael fizeram? (ibid.: p.29, fn.10)

‘ what did they do to Rafael? ’

既に述べたように、(50b)における Adjunct (*amiúde*) は、Agrs の Checking Domain 内に基底生成される。[+dS-TOPIC] が付与された Pol は、PolP まで投射される。結果として、_i に付与された素性 [+wh] が下方浸透する派生としての (50b) と (50c) は、ERM によって排除される。BP- において、_i に付与された素性 [+wh] の上昇浸透が適用されたと考えた場合、(50b) と (50c) は適格と予測される。BP- において、Wh-Movement Strategy の代替として Focus Strategy が存在しないため、素性 [+wh] の上昇浸透が存在しないことになる。²⁰⁾

[補遺 2] EP における Sentence Adverb と素性 [+Affective] の関与

Rouveret (1999: p.647) は、EP における [Wh 要素 + Adverb + 動詞] の語順が排除されるという。後述するように、この語順が排除されるのは、Simple Wh 要素が生起する場合に限定される。

(51d, e) が示すように、Rouveret (1999) は、EP- (EP-A) に属す。(51a)で示されるように、文副詞 (*provavelmente*) は、Pol の Checking Domain にも生成可能である。これにより、(51b) の非文性が説明される。

(51) a. o João provavelmente deu esse livro à Maria ontem (Rouveret 1999: (25a))

‘ João probably gave this book to Mary yesterday ’

b.*a quem provavelmente deu o João esse livro à Maria ontem? (*ibid.*: (25c))

‘ who did João probably give this book to Mary yesterday to? ’

[c. que livro provavelmente deu o João à Maria ontem?]

‘ what book did João probably give to Mary yesterday? ’

d. que livro a Maria lhe deu ontem? (Rouveret 1999: (6a))

‘ what book did Maria give to him yesterday? ’

e.*ISSO eu lhe disse (*ibid.*: p.666)

‘ it is this that I told him ’

EP- グループにおいて、D-Linked Wh 要素が生起する場合の先行詞統率要件が、Binding によって代替される。よって、D-Linked Wh 要素 (*que livro*) が生起する用例 (51c) が、適格と予測されることになる。この予測は、同じ EP- に属す Ambar (1992) が挙げる文副詞 (*talvez* (perhaps)) の用例 (52d-e) に対する判断によって例証される ((52d-e) は、基本的に適格と判断される)。

(52) a. eles talvez digam a verdade (EP) (Ambar 1992: p.104, (211a))

‘ (perhaps) they will say the truth ’

b.*que talvez eles digam? (EP) (*ibid.*: (213a))

c.*que talvez digam eles? (*ibid.*: (213b))

‘ what will they say? ’

d. ?que disparate talvez eles digam? (EP) (ibid.: (214a))

‘ which nonsense will they say? ’

e. ?que livro talvez eles comprem? (EP) (ibid.: (214b))

‘ which book will they buy? ’

EP- と EP- としての用例 (51b-c) は共に、不適格と予測される。BP に対して、どのような予測が可能となるか。素性 [dS-TOPIC] が関与しない。よって、Wh-Movement Strategy のみが適用される BP- では、(51b-c) が共に、不適格と予測される。Wh-Movement Strategy の代替としての Focus Strategy が発動した場合の派生もまた、不適格と予測される (ERM に抵触する)。²¹⁾ に付与された素性 [+wh] の上昇浸透が適用された場合の派生は、語彙的に実現された主語要素 (o João) に格 (Nominative) が付与されないため、不適格と予測される。つまり、BP の用例としての (51b-c) が、不適格と予測される。²¹⁾

NPI (ninguém) が生起する EP 用例 (53a) の判断は、対応する BP 用例 (48b) のそれと衝突する ((48b) を、(53b) として再掲する)。具体的に、(53a) の適格性が問題となる。(53a) の適格性は、(54a-c) の適格性に並行するものと考えられる。

(53) a. ninguém provavelmente errará (EP) (Rouveret 1999: (44b))

‘ nobody will probably will fail ’

b. *ninguém provavelmente telefonará às 5 (BP) (ibid.: 36b))

‘ nobody will probably telephone at five ’

(54) a. todos provavelmente errarão (EP) (Rouveret 1999: (44a))

all probably will fail ‘ all will probably fail ’

b. todos os amigos cuidadosamente a felicitaram (EP) (ibid.: (43b))

all the friends carefully her congratulated ‘ all the friends carefully congratulated her ’

c. alguém cuidadosamente fechou as janelas (EP) (ibid.: (43a))

somebody carefully closed the windows ‘ somebody carefully closed the windows ’

d. nunca aqui morreu ninguém (EP) (Perini 1989: p.114)

never here died nobody ‘ never did anybody die here ’

(54) において、quantifier(+NP) と NPI 要素の左方移動が発動している。この左方移動の引き金は何か。Pol₁ (Pol₂) にそれぞれ、素性 [+quantifier] と素性 [+neg] が付与されると考える。同時に、Quantifier (+NP) と NPI 要素がそれぞれ、素性 [+quantifier] と [+neg] を付与されると想定する。既に述べたように、Pol₁ (Pol₂) に付与された素性 [+neg] が、順次 Agrs まで下方浸透する (当該素

性の下方向浸透プロセスに関しては、後述する)。素性 [+quantifier] もまた、Agrs まで下方向浸透すると考える。BP と同様に、Adjunct (*provavelmente, cuidadosamente, aqui*) が、Pol の Checking Domain にも生成可能と考える。EP において、素性 [+quantifier]、あるいは素性 [+neg] を付与された Pol が PolP まで投射される考えてみよう。これにより、(54a-d) に対して、適切な派生が想定可能となる。例えば (54a) において、素性 [+quantifier] が Pol₂ に付与される (Pol₂ が PolP まで投射される)。Adjunct (*provavelmente*) が Spec(Pol₂) に基底生成される。[+quantifier] NP (*todos*) が Agrs の Checking Domain を経由して、Pol₂P に左方付加した位置へ移動する。この派生は、ERM に抵触することはない。同様に、NPI (*nunca*) が生起する用例 (54d) と (53a) もまた、適格と予測される。²²⁾

素性 [+neg] が付与された Pol が PolP まで投射されることは、(56) によっても例証される。前述のように、(55c) は ERM によって排除される (Ambar (1992) が属すと考えられる EP-B (2) において、定動詞に付与される素性 [+topic] が Weak と指定されるため、定動詞が Agrs 位置に生成される)。否定要素 (*não*) が生起する (56a) は適格と判断される。この判断は、素性 [+neg] を付与された Pol が PolP まで投射されることにより説明される。(56a) において、素性 [+neg] が Pol₂ に付与される (これに連動して、定動詞 (*não mora*) は、Pol₂ に生成される)。素性 [+neg] と素性 [±dS-TOPIC] が同一の Pol (この場合、Pol₂) に付与可能と想定する。Pol₁ に付与された素性 [+TopicFocus] は、順次 Agrs まで下方向浸透する。[+dS-Topic] NP (*o Pedro*) は、Spec(Pol₂) へ移動する。[+FocusT] XP (*em Lisboa*) は、Pol₂P に左方付加した位置を経由して、Pol₁ の Checking Domain へ移動する。この派生が、ERM によって排除されることはない (適格と予測される)。

(55) a. o Pedro mora em Lisboa (Ambar 1992: p.78, (110a))

‘ Pedro live in Lisbon ’

b.*em Lisboa, o Pedro mora (ibid.: (110b))

c.*EM LISBOA, o Pedro mora (ibid.: (110c))

d.*em Lisboa, O PEDRO mora (ibid.: (110d))

(56) a. em Lisboa/EM LISBOA, o Pedro não mora (Ambar 1992: p.80, (126))

‘ in Lisbon/IN LISBON, Pedro does not live ’

b. em Lisboa/EM LISBOA, apenas o Pedro mora (ibid.: (122))

‘ in Lisbon/IN LISBON, only Pedro lives ’

[-dS-TOPIC] Adjunct (*em Lisboa*) が生起する (55b), (55d) 等の用例は, Pol₁ に付与された当該素性が, 少なくとも下位の Pol₂ まで下方浸透すると前提することにより説明される (これに関する詳細な論考は, 稿を改める) (56b) の適格性は, 後述する素性 [+affective] が関与する用例として説明される。²³⁾

só (apenas) + NP (*até* + NP) は, 基本的に Quantifier + (NP) と類似の挙動をとると考えられる。*só (apenas)* + NP と *até* + NP が生起する派生において, 素性 [+affective] が関与すると想定する。しかしながら, 判断の揺れが観察される。素性 [+affective] が関与する (57b) と (57f) に対する判断が異なっている。 (57b) において, [主語 + 定動詞] の語順が許容される。 (57f) では, この語順が排除される。ある EP グループにおいて, [+quantifier] XP と [+affective] XP が類似の挙動をとる (これらの素性をもつ最大範疇が左方移動した場合, [主語 + 定動詞] の語順が排除される)。このグループに, Madeira (1995) と Rouveret (1999) が属す (このグループを, EP-X と呼ぶ)。 [+quantifier] XP と [+affective] XP が左方移動した場合, [主語 + 定動詞] の語順が許容されるグループ (EP-Y) を想定する ([+quantifier] XP が左方移動した派生における語順 [主語 + 定動詞] の適格性は確認されていないが (57g))。このグループに, Kato & Raposo (1996) が属す。

(57) a. *só* esses CDs me recomendou a Maria (EP/*BP) (Kato & Raposo 1996: (5a))

b. *só* esses CDs a Maria me recomendou (EP/BP) (Kato & Raposo 1996: (5b)) <

‘ Maria recommended me only these CDs ’

c. *todas* estas flores me ofereceram eles (EP) (Madeira 1995: p.151, (59a))

d. **todas* estas flores eles me ofereceram (EP) (*ibid.*: (59b))

‘ they offered me all these flowers ’

e. *até* à Maria o apresentaram eles (EP) (Rouveret 1999: (58b))

f. **até* à Maria eles o apresentaram (EP) (*ibid.*: p.666) <

‘ they presented him even to Maria ’

[g. *todas* estas flores eles me ofereceram (EP)]

BP としての用例 (57a) の非文性は, 定動詞が Agrs に生成されることを物語る。主語 NP (*a Maria*) が Agrs の Checking Domain へ移動していないため, 当該主語に格 (Nominative) が付与されない。結果として, この場合の派生が不適格と予測されることになる。EP において, 主語 NP は, それが基底生成された位置で格 (Nominative) を付与される。つまり, EP の用例としての (57a) は, 適格と予測される。EP において, 素性 [+affective] ([+quantifier]) と素性 [+dS-TOPIC] が同一の Pol に付与されないと考えてみよう。EP-X は, Rouveret

(1999) が属す EP-A を含む。当該グループにおいて、素性 [+dS-TOPIC] が付与された Pol が Pol' まで投射される。さらに、[+affective] ([+quantifier]) XP に関する先行詞統率要件が、Binding によって代替されることもない。結果として、EP-X グループとしての用例 (57b) と (57d) は、ERM によって排除される。つまり、適切な予測が可能となる。

EP-Y としての (57b) と (57d) は適格と判断されるであろう。これは、素性 [+dS-TOPIC] が付与された Pol が PolP まで投射されるグループ、あるいは、Inner-Argument [+affective] XP に関する先行詞統率要件が Binding による代替が発動するグループの用例として説明される。よって、EP-Y は、EP-B を内包すると考えられる。²⁴⁾

ここで、(56b) に検討を加える。素性 [+quantifier] の場合と同様、素性 [+affective] が付与された Pol が PolP まで投射される考える。Ambar が属す EP-B (2) において、定動詞に付与される素性 [+topic] が Weak と指定される (定動詞は、Agrs 位置に生成される)。Pol₁ に付与された素性 [+TopicFocus] が、順次 Agrs まで下方浸透する。Pol₂ に付与された素性 [+affective] もまた、順次 Agrs まで下方浸透すると考えてみよう。[+FocusT] Adjunct (*em Lisboa*) は、AgrsP に左方付加した位置と Spec(Pol₂) を経由して、Pol' に左方付加した位置へ移動する。[+affective] NP (*apenas o Pedro*) もまた、AgrsP に左方付加した位置を経由して、Pol₂P に左方付加した位置へ移動する (EP の Spec(Agrs) 位置に *pro* が生成されると想定されている)。この派生は、ERM によって排除される (問題点)。ここで、素性 [+affective] の下方浸透が Pol₂ までと考える。[+affective] NP (*apenas o Pedro*) は、AgrsP に左方付加した位置を経由する必要がない。当該要素は、Spec(Pol₂) 位置へ一挙に移動する。[+FocusT] Adjunct (*em Lisboa*) は、AgrsP と Pol₂P に左方付加した位置を経由して、Pol' に左方付加した位置へ移動する。この移動が、ERM によって排除されることはない (適格と予測される)。[-dS-TOPIC] NP (*em Lisboa*) が生起する用例もまた、同様の論法によって説明される。BP の用例としての (56a-b) もまた、適格と予測される。²⁵⁾

(58b) と (58c) は、問題を惹起する。前述のように、NPI (*raras vezes*) が Pol の Checking Domain に基底生成されると考えることはできない。当該位置に基底生成される場合、(58b) は、適格と予測される。これまで、Pol に付与された素性 [+neg] が Agrs まで下方浸透すると想定されている。₁ に付与された素性 [+wh] もまた、順次 Agrs まで下方浸透する。NPI 要素 (*raras vezes*) と

[+wh] 要素 (*que tema*) が AgrsP に左方付加した位置を経由する (EP の Spec (Agrs) 位置に *pro* が生成される)。Wh 移動に関して, Madeira (1995) が EP- に属すと考え (当該グループにおいて, D-Linked Wh 要素に対する Binding 代替が適用されない)。結果として, (58b) が ERM によって排除される。同じ論法は, 複数の NPI 要素が左方移動する (58c) を不適格と予測する (問題点)。

(58) a. *aquele tema raras vezes foi bem tratado* (EP) (Madeira 1995: p.162, (73a))

that topic rarely was well treated ' that topic was rarely treated well '

b. ?**que tema raras vezes foi bem tratado?* (EP) (*ibid.*: (73b))

which topic rarely was well treated ' which topic was rarely treated well? '

c. *nunca ninguém gostou de min* (EP) (Gartner 1998: p.108)

never nobody liked me ' never did anybody like me '

この問題は, 以下の論法によって打開されると思われる。Madeira (1995) と異なり, Pol に付与された素性 [+neg] の下方浸透が Pol₂ までと指定されるグループの存在を想定する。このグループに, Gärtner (1998) が属す。(58c) において, 素性 [+neg] が Pol₂ に付与される (Pol₂ が Pol₂P まで投射される)。NPI 要素 (*ninguém*) が, Spec(Pol₂) へ移動する。NPI 要素 (*nunca*) が Pol₂P に左方付加した位置へ移動する。この派生は, ERM の要請をみたす (適格と予測される)。よって, (58c) が適格と判断されるグループにおいて, (58b) もまた, 適格と予測されることになる ((58b,c) に対応するスペイン語用例を勘案した考察は, 補遺 3 でなされる)。²⁶⁾

最後に, (59) に検討を加える。(59a) は, 最大範疇に付与される素性 [+quantifier] と [+affective] が, Weak と指定されることを物語る。(59b) では, 最大範疇 (*só um presente*) の素性 [+affective] が, Strong と指定される。(59c) では, 最大範疇 (*a alguém*) の素性 [+quantifier] が Strong と指定される。(59d-e) で観察されるように, 両素性が Strong と指定される派生は, 不適格と判断される。素性 [+affective], あるいは素性 [+quantifier] が付与された Pol が PolP まで投射される。素性 [+affective] の下方浸透は, Pol₂ までと指定されている。仮に, 素性 [+quantifier] が Agrs まで下方浸透すると前提されている。Madeira (1995) において, 内項に対する Binding 代替が適用されない。これらの前提により, (59d-e) が共に適格と予測される (問題点)。

(59) a. *ele deu só um presente a alguém* (EP) (Madeira 1995: p.178, fn.21)

b. *só um presente deu ele a alguém* (EP) (*ibid.*)

c. a alguém deu ele só um presente (EP) (ibid.)

d.*só um presente a alguém deu ele (EP) (ibid.)

e.*a alguém só um presente deu ele (EP) (ibid.)

‘ he gave only one present to someone ’

この問題は、Madeira (1995) において、素性 [+affective] が Agrs まで下方浸透すると想定することにより打開される (素性 [+affective] と素性 [+quantifier] の双方が、Agrs まで下方浸透する)。複数の要素が AgrsP に左方付加した位置を経由するため、(59d-e) が不適格と予測される。(59a-c) において、[+affective] XP と [+quantifier] XP のどちらか、あるいは双方が LF 移動する。主語 NP (*ele*) が Pol の Checking Domain へ移動している (59a) は、ERM によって排除される (その Spec 位置に当該主語要素が生起する Pol の最大投射に複数の要素が移動する)。この問題は、Pol に直接付与された素性 [+affective] 以外の下方浸透の適用を受けた当該素性が、LF において (Spell Out の時点で) 削除されることにより、打開可能であろう (素性 [+quantifier] の場合も、同様)。この素性削除は、何らかの意味で類似すると考えられる素性 [+affective] と素性 [+quantifier] が関与する場合に限定される。²⁷⁾

前述のように、Madeira (1995) において、Pol に付与された素性 [+neg] は Agrs まで下方浸透する。これにより、(60a) の非文性が説明される。(60b) において、下方浸透した素性 [+quantifier] の削除が適用されない。Pol₁ に素性 [+quantifier] が付与される派生で考える (Pol₁ の最大投射として、Pol₁P が指定される)。Pol₁ に付与された素性 [+quantifier] は、順次 Agrs まで下方浸透する。[+wh] NP (*a quem*) は、AgrsP に左方付加した位置へ移動し、Pol₁ と Pol₂ の Checking Domain を経由して、最終的に ₁ の Checking Domain まで S 移動する。[+quantifier] NP (*alguém*) もまた、AgrsP に左方付加した位置を経由して、LF 移動する。この移動は、ERM によって排除される。²⁸⁾

(60) a.*?ISSO nunca disse eu (EP) (ibid.: p.179, fn.22)

‘ that I never said ’

b.*a quem deu alguém flores? (EP) (ibid.: p.151, (60))

‘ to whom did someone give flowers? ’

[補遺 3] スペイン語における NPI の挙動 (EP との比較において)

本稿の (58c) のパターンに対応するイタリア語用例とスペイン語用例は、共に適格と判断される。当該用例において生起する NPI は、*nobody* (*ninguém*,

nessuno, nadie) と *never* (*nunca, mai*) である ((58c) を (61c) として再掲する)

- (61) a. *mai nessuno/nessuno mai mi aveva parlato così* (Italian) (Zanuttini 1991: p.115)
 ‘ nobody had ever spoken to me like that ’
 b. *nunca nadie/nadie nunca afirmó tal cosa* (Spanish) (Laka 1990: p.121, fn.14)
 ‘ nobody ever acknowledged such a thing ’
 c. *nunca ninguém gostou de mim* (EP) (Gartner 1998: p.108)
 ‘ never did anybody like me ’

スペイン語において、複数の NPI が生起する用例に対する判断に、揺れが観察される。本稿の著者が調査した限りにおいて、*nunca* と *nadie* が生起する (61b) は、すべての話者グループにおいて適格と判断される。(61b) のみが許容されるグループが存在する (これを、Aグループと呼ぶ)。 *nunca* と *nada* が左方移動した用例 (62b) を適格と判断するグループが存在する (このグループにおいて、左方移動する NPI の一方が *nunca* である用例が適格と判断される) (これを、B グループと呼ぶ)。 B グループにおいて、(62c) は、不適格と判断される。さらに、NPI の類別に関係なく、複数の NPI 要素が左方移動した用例 (62d) が適格と判断されるグループの存在も確認される (これを、C グループと呼ぶ)。

- (62) a. *nunca nadie/nadie nunca afirmó tal cosa* (Spanish) (Laka 1990: p.121, fn.14)
 ‘ nobody ever acknowledged such a thing ’
 b. *nunca nada/?nada nunca diré que te pueda ofender* (Spanish) (Zubizarreta 1998: p.184, fn.11)
 ‘ never will I say anything that could offend you ’
 c. **nada nadie/*nadie nada dijo* (Spanish) (Zubizarreta 1998: p.184, fn.11)
 ‘ nobody said anything ’
 d. *a ningún hijo mío nadie le trata así* (Spanish) (Laka 1990: p.122, fn.15)
 ‘ nobody will treat any of my sons like that ’

(63) Variation of judgements:

	Aグループ (Laka 1990)	Bグループ (Zubizarreta 1998)	Cグループ
(62a)	ok	ok	ok
(62b)	*	ok	ok
(62c)	*	*	ok
(62d)	*	*	ok

A グループと B グループの相違は、どのように説明されるか。これは、以下の Parameter を想定することにより説明可能と思われる。(64A) は、左方移動す

る主語要素が Spec(Agrs) を通過する可能性に関する Parameter である。主語要素の左方移動が発動しない場合、Spec(Agrs) 位置に *pro* が生成される。主語要素の左方移動がする場合にも、当該 Spec 位置に *pro* が生成されるグループ (B グループ) が存在する (この点で、B グループは、EP と同様の挙動をとる)。主語要素が左方移動する派生において、当該要素が Spec(Agrs) を経由するグループが存在する (A グループ)。この点で、A グループは BP に類似する)。この場合、Spec(Agrs) 位置に *pro* が生成されることはない (主語要素の左方移動が発動しない場合、Spec(Agrs) に *pro* が生成される)。 (64B, C) は、複数の NPI 要素が移動する派生の適格性に関する Parameter を構成する。派生 [NPI₁ + NPI₂ + V] と派生 [NPI₂ + NPI₁ + V] の適格性が、お互いに影響を与える事象を想定する。A グループにおいて、上の両派生が共に適格と判断される場合に限り、これらの派生が適格と判断される。B グループでは、一方の派生が適格に生成される場合、両派生が適格と判断される。

(64) Parameter:

- A. The subject element moving rightwards may land on Spec (Agrs) .
- B. The derivation [NPI₁ + NPI₂ + V...] is judged grammatical if and only if the derivation involved and the derivation [NPI₂ + NPI₁ + V...] are both properly generated.
- C. The derivation [NPI₁ + NPI₂ + V...] is judged grammatical if either of the derivation involved and the derivation [NPI₂ + NPI₁ + V...] is properly generated.
- D. The feature [+neg] assigned to Pol successively percolates down to Agrs.
- E. The feature [+neg] assigned to Pol percolates down to Pol_k.

(65) Parameterization:

	(64A)	(64B)	(64C)	(64D)	(64E)
A Group	+	+	-	+	-
B Group	-	-	+	+	-
C Group	?	?	?	-	+

以下に述べるように、Adjunct NPI (*nunca*) は、Pol₂ の Checking Domain に基底生成される。(62a)における [*nadie* + *nunca*] の派生は、ERM 違反を惹起することはない (素性 [+neg] を付与された Pol₂ の最大投射として Pol_P が指定され、*nadie* のみが Agrs の Checking Domain を経由する)。 [*nunca* + *nadie*] の派生において、両 NPI 要素が Agrs の Checking Domain を経由する。A グループにおいて、左方移動する主語 NPI (*nadie*) は、Spec(Agrs) を経由可能である。つまり、 [*nunca* + *nadie*] の派生は、適格と予測される。結果として、A グループとしての (62a) が適格と予測されることになる。B グループにおいて、一方の

NPI 語順が適格と判断された場合，他方の NPI 語順もまた適格と判断される。よって，B グループとしての (62a) が適格と予測される。

(62b) における NPI 語順 [*nada* + *nunca*] は，適格と予測される。語順 [*nunca* + *nada*] は，ERM によって排除される。Spec(Agrs) 位置に *pro* が生成されるため，複数の NPI 要素が AgrsP に左方付加した位置を経由する。結果として，A グループとしての (62b) は，不適格と予測される。B グループとしての (62b) は，適格と予測される。同様の論法は，A グループとしての (62c) を不適格と予測する。同様に，B グループとしての (62c) もまた，不適格と予測される（複数の NPI が AgrsP に左方付加した位置を経由する）。C グループとしての (62a-d) はすべて，適格と予測される。これは，Parameter (64E) によって説明される。C グループにおいて，Pol に付与された素性 [+neg] は，Pol₂ まで下方浸透する（Pol₂ に付与された当該素性の下方浸透は適用されない）。言うまでもなく，A-C グループにおいて，3 種の NPI 要素が左方移動する派生は ERM によって排除される。

Adjunct NPI (*jamás* (never)) もまた，Pol₂ の Checking Domain に基底生成される。これにより，以下の (66) が説明可能となる。

- (66) a. ¿a quién *jamás* ofenderías tú con tus acciones? ‘ who would you never offend with your actions? ’
 b. ¿a quién *nadie* ofendería con sus acciones? ‘ who would nobody offend with his actions? ’
 c. ¿a quién Carmen *jamás* llama? ‘ who does Carmen never call? ’
 d. ¿a quién Carmen *nada* dijo? ‘ who did Carmen say nothing to? ’
 e. ¿con quién a las cinco *nunca* tomaste el té? ‘ with whom did you never have tea at five? ’

(67) Distribution of judgements :

	(66a)	(66b)	(66c)	(66d)	(66e)
. (Suñer (p.c.) ; Bosque (p.c.) ; Zubizarreta (1998))	ok	*	*	*	*
. (Demonte (p.c.))	ok	ok	*	*	*
. (Inclán Nichol (1997))	ok	ok	ok	ok	ok

グループにおける判断は，当該グループが B グループに属すと考えることにより説明される。グループにおける判断は，A グループ，あるいは C グループのそれとして説明される。グループは，基本的に C グループに属す。グループにおいて，一方の Pol に素性 [+neg] が付与された場合，双方の Pol が PolP まで投射されると考えられる。(66e) の適格性からして，当該グループにおいて，素性 [+dS-TOPIC] を付与された Pol が PolP まで投射されると考える

ことはできない。少なくとも、そのように考える必要がない。²⁹⁾

EP としての用例 (58) に再検討を加える (当該用例を (68) として再掲する)。本稿の [補遺 2] では、(68a-c) を単一の話者グループに属すと考えすることはできないと想定した。(68a-b) において、Pol (Pol₂) に付与された素性 [+neg] が Agrs まで下方浸透すると考えた。一方、(68c) では、当該素性の下方浸透が Pol₂ まで適用されると想定した。スペイン語 (イタリア語、カタロニア語) における NPI 要素の検討で明らかとなったように、一般的に (68c) のタイプは許容される (素性 [+neg] の下方浸透プロセスの相違に関係なく)。

- (68) a. *aquele tema raras vezes foi bem tratado* (EP) (Madeira 1995: p.162, (73a))
 that topic rarely was well treated ' that topic was rarely treated well '
 b. ?**que tema raras vezes foi bem tratado?* (EP) (ibid.: (73b))
 which topic rarely was well treated ' which topic was rarely treated well? '
 c. *nunca ninguém gostou de min* (EP) (Gärtner 1998: p.108))
 never nobody liked me ' never did anybody like me '

つまり、(68a-c) がすべて、同一の話者グループに属すと考えることも可能である。本稿では、EP の Spec(Agrs) 位置に常に *pro* が生成されると想定されている。これが妥当する場合、subject NPI 要素が Spec(Agrs) を経由することはない ((65A) で確認されるスペイン語の A グループに対応する EP グループが存在しないことになる)。Adjunct (*nunca*) が Pol の Checking Domain 内に基底生成されると考えてみよう。スペイン語の B グループに対応する EP グループが存在すると考えた場合、以下の予測 (69) が可能となる。さらに、(67) で確認されたスペイン語の グループに対応する EP グループが存在すると考えた場合、以下の予測 (70) が可能となる。³⁰⁾

- (69) a. *nunca ninguém/ninguém nunca gostou de min* (EP)
 ' never did anybody like me '
 b. *nunca nada/nada nunca leu a Maria* (EP)
 ' Maria never read anything '
 c. ?**nada ninguém/ninguém nada leu* (EP)
 ' nobody read anything '

- (70) a. *a quem nada comprou a Maria?* (EP)
 ' to whom did Maria buy anything? '
 b. *que tema/que raras vezes discutiu a Maria?* (EP)
 ' which theme. what did Maria discuss rarely? '

註

- 1) (1) の判断が下されるグループを グループと呼ぶ。(2) の判断を示グループを グループと呼ぶ。
- 2) Copula (*ser, estar*), Unaccusative verb (非対格動詞) と一部の Unergative (非能格動詞) が VS 語順を許容する (ia-c)。これに対応して、これらの動詞が生起する Wh 疑問文でも、VS の語順が許容される (iia-c)。
 - (i) a. são impossíveis os meninos (Silva 1999: p.47, (4b))
 ' the boys are impossible '
 - b. nasceu o filho da Cida (unaccusative) (ibid.: p.150, (38b))
 ' The son of Cida was born '
 - c. ligou o Carlos (unergative) (ibid.: p.220, (93c))
 ' Carlos telephoned '
 - (ii) a. quem é você? (Silva 1999: p.6, fn.4))
 ' who are you? '
 - b. quando sai o jornal? (unaccusative) (ibid.: p.7, (9b))
 ' when does the newspaper come out? '
 - c. quando vai ligar a Ana? (unergative) (ibid.: p.220, (93d))
 ' when will Ana telephone? '
- 3) 以下の (i) と (ii) は、本稿で採用される連言の適正統率 (空範疇原理 (Empty Category Principle (ECP)) と先行詞統率の定義である ((iii) と (iv) は、M 統御と主要部統率の定義)。
 - (i) X is properly governed iff (a) and (b) :
 - (a) X is canonically head-governed (Licensing)
 - (b) X is antecedent-governed (Identification)
 - (ii) X antecedent-governs Y iff
 - (a) X and Y are coindexed
 - (b) X m-commands Y
 - (c) no barrier intervenes
 - (d) Extended Relativized Minimality (ERM) is respected.
 - (iii) X m-commands Y iff X does not dominate Y and every maximal projection that dominates X dominates Y.
 - (iv) X head-governs Y iff
 - (A) a. X is a head
 b. X m-commands Y
 - (B) $X = \{ [\pm V, \pm N], C, 1, \text{Pol}, \text{Agrs}, \dots \}$
 - (C) a. no barrier intervenes
 b. Extended Relativized Minimality (ERM) is respected.

X⁰ 範疇の Checking Domain として、当該 X⁰ に (左方) 付加した位置 (あるいは、その Morphologically Selected Slot 位置) が指定される (主要部移動の場合)。最大範疇の移動に対して

は, X^0 の最大投射に付加 (左方, あるいは右方) した位置と $\text{Spec}(X)$ が指定される (Toribio 1993, Chomsky 1992)。この前提の下では, $[+wh]$ XP が Pol^1 に付加した位置においてその移動を停止することになる (Root Context において)。Embedded (Embd.) Context では, Matrix V がその Sister 要素である CP の主要部に素性 $[+wh]$ を付与する (当該素性は, Pol^1 と Pol を経由して Agra まで下方浸透する)。よって, Embd. CP 内部では, $[+wh]$ XP が Embd.C まで移動する。移動はすべて, 同一方向である。例えば, 左方移動した要素が次の移動段階において右方移動することはない。

- 4) 仮に, スペイン語の定動詞が Pol^2 に生成されると考える。ポルトガル語の定動詞の位置に関しては, 後述する。ポルトガル語との並行性からすれば, スペイン語の定動詞もまた, Agra 位置に生成されると考えるべきであろう (これに関する論考は, 稿を改める)。
- 5) BP における顕在的な主語要素は, Agra の Checking Domain へ移動することにより, 格 (Nominative) を付与される。主語要素が非顕在的である場合, Agra の Checking Domain に *pro* が生起すると考える。Minimalist Program の観点からの当該事象の説明法に関しては, Silva (1999) を参照されたい。
- 6) これにより, 以下の予測が可能となる。(ib) において, *pro* が Agra の Checking Domain (AgraP に左方付加した位置) へ移動している点に留意されたい。(10a) と (ic) における *amiúde* は, Agra よりも下位にある最大投射に付加した位置に基底生成される。

- (i) a. (o governo) *amiúde* toma estas medidas
 ‘ the government/it often takes these measures ’
 b. *que medidas *amiúde* toma?
 ‘ what measures does it often takes? ’
 c. que medidas toma *amiúde*?

通常の素性 $[+Topic]$ と素性 $[+dS-Topic]$ は, それが付与された Pol の投射範囲を特定する。 $[+dS-Topic]$ と $[-dS-Topic]$ が同一の Pol に付与されることはない。それでは, $[+dS-Topic]$ 要素と $[-dS-Topic]$ 要素が共起する用例に対して, どのような予測が可能となるか。これまでの仮説群は, 以下の (ia-b) を共に適格と判断する。恐らく, 当該用例は共に, 不適格と判断されるであろう。この判断が妥当する場合, 問題が惹起する。この問題は, 素性 $[-dS-Topic]$ が順次 Agra まで下方浸透すると考える仮説 (ii) によって打開されるであろう (詳細な論考は, 稿を改める)。AgraP に左方付加した位置を複数の最大範疇が経由するため, 当該派生は ERM によって排除される。

- (i) a. o que ao Rafael os alunos fizeram?
 b. o que os alunos as Rafael fizeram?
 ‘ what did the pupils do to Rafael? ’
 (ii) Hypothesis:
 The feature $[-dS-Topic]$ successively percolates down to Agra.

- 7) 以下の予測が可能となる。仮に, (ic) が不適格と判断される場合, Adjunct (*ainda*) が Pol^2 の Checking Domain に生成されると考えなければならない。また, (id) が適格と判断される場合, 素性 $[+dS-Topic]$ に対する前提を 素性 $[+Subject-Topic]$ にも拡張する必要がある (これに関する論考は, 稿を改める)。

- (i) a. o Ivo ainda estuda francês no seu tempo livre
 b. *que idioma ainda estuda no seu tempo livro?

- c. que idioma ainda o Ivo estuda no seu tempo livre?
 d.*que idioma um aluno ainda estuda no seu tempo livre?
 what language a pupil still studies in his free time
 ‘ what language does a pupil still study in his free time? ’

- 8) 本稿で想定される素性 [+Topic], [+TopicFocus] 等の Discourse Feature は, S 移動 (統語移動) Checking が適用された場合でも削除されない点に留意されたい。
 これ以降, 定動詞に付与される素性 [+topic] と区別するため, 同一素性をもつ最大投射の移動を随伴する素性 [+Topic] ([+dS-Topic]) を [+TOPIC] ([+dS-TOPIC]) と表記する。XP に付与された素性 [+TOPIC] ([+dS-TOPIC]) は, Strong 指定される (当該要素の統語移動 (S 移動) が発動する)
 9) Cliticization (Proclisis vs. Enclisis) に関する考察は, 稿を改める。EP-A においても, 定動詞に付与される素性 [+topic] が Weak と考える。後述するように, BP において, 当該素性は Strong と指定される。EP において, 定動詞が生起する CP 内の Spec(Agrs) に 常に pro が生成されると考える (顕在的な主語要素が, 基底生成された位置に生起する場合でも)
 10) EP-B (1) と EP-B (2) の用例としての (13d) もまた適格と予測される。以下の用例は, 興味深い。BP 同様, EP においても, ①に付与された素性 [+wh] は順次 Agrs まで下方浸透する。

- (i) a. que livro o Paulo leu? (Costa 1996: (4a))
 b.*que o Paulo leu? (Costa (p.c.))
 ‘ what book did Paolo read? ’
 c. que leu o Paulo?
 ‘ what did Paulo read? ’

- (ii) a.*que livro un homem leu? (Costa 1996: (9a))
 b.*que un homem leu?
 ‘ what did a man read? ’

仮説 (18A) によって, (iia-b) は, 不適格と予測される (主語 NP (*um homem* が [-definite]), (ia-b) が適格と予測される。現実には, (ib) が不適格と判断される (Costa (1996) が属す EP-B (1) において, Binding による代替が適用されない点に留意されたい)。この問題に関しては, 第 3 節で再検討する。

- 11) 通例, BP の Cliticization は, Proclisis によって発動する。しかしながら, Proclisis が発動した (i) もまた, 不適格と予測される。

- (i) *a Maria me recommendou ESTES DISCOS

- 12) 主語 NP (*a Maria*) が最初に移動する場合, 以下の (ia) が生成される。また, 素性 [+TopicFocus] と [+TOPIC] が異なる Pol に付与された場合, (ib-c) が生成される。

- (i) a. a Maria ESTES DISCOS me recomendou
 b. a Maria, ESTES DISCOS me recomendou
 c. ESTES DISCOS, a Maria me recomendou

- 13) 更なる調査が必要であるが, EP-A と EP-B (2) が EP- に対応すると考えられる。EP-B (1) は, EP- に対応するであろう。後述する Wh Interrogative に関する Parameter が妥当する場合, EP-

における [+FocusT] XP + Subject + V] の語順が排除されることになる (調査の要) 。 Embedded Context における語順に関しても、異なる話者グループの存在が確認される。Barbosa (1995: p.117) は、Embedded Context における [[+wh] XP + Subject + V] の語順が許容されると言う (Teyssier (1984: p.127) も、同様の指摘をする) 。 Brito & Pereira (1974: p.238) は、Embedded Context と Root Context の語順関係が基本的に同一と指摘する。Ambar (1992: p.61) は、Wh 要素 (*que, porque*) が生起する場合の当該語順が不適格、あるいは周辺的であると判断する (その他の用例は、適格と判断される) 。

Embedded Context における挙動は、稿を改めて検討する。

(i) a.**não sei que o Pedro ofereceu à Joana* (Ambar 1992: p.61, (26b))

‘ I don't know what Pedro offered to Joana ’

b.**não sei porque a Rita saiu* (*ibid.*: (31b))

‘ I don't know why Rita went out ’

- 14) 主語、目的語の Stress 領域として、VP が指定される。よって、例えば主語 NP に Informational Focus Stress が付与される場合、当該主語が基底生成される位置 (VP に右方、あるいは左方付加した位置) が最も深く埋め込まれた位置に対応する。主語 NP よりもより深く埋め込まれた位置に生成される直接目的語が共起する場合、当該目的語が上位の位置へ移動 (Scrambling) することによって初めて、主語 NP への Informational Focus Stress の付与が可能となる。
§3.1 以前で言及された Focus は、Contrastive Focus に対応する (これを、単に Focus と呼ぶことにする) 。 IF Stress を付与される要素に、二重下線を付す。
- 15) VP 内部において、IO NP (*à Joana*) が DO NP (*as flores*) よりも上位に基底生成され则认为。主語 NP (*o Pedro*) は、IO NP (*à Joana*) よりも上位に基底生成される。この種の Scrambling に関しては、Zubizarreta (1998) を参照されたい。
- 16) 仮に、EP- における D-Linked Wh 要素に対して、Focus Strategy による代替が適用されないと考える (BP- との並行性) 。 Wh-Movement の代替として Focus Strategy において、定動詞に付与される素性 [+topic] は、Strong と指定される。 Wh-Movement の代替ではない本来の Focus Strategy の場合、定動詞に付与される素性 [+topic] は、Weak と指定される。
- 17) 同様の論法により、以下の (i) における主語 NP (*um homem*) が基底生成された位置にあると考えることはできない。

(i) *que leu um homem?* ‘ what did a man read? ’

- 18) Wh-Movement Strategy の代替として適用された Focus Strategy では、この上昇浸透が適用されないと考える。
具体的に、(47a) は、素性 [+TopicFocus] と素性 [+dS-TOPIC] が同一の Pol に付与された派生として説明される。BP において、定動詞に付与される素性 [+topic] が Strong と指定される考えてきた。しかしながら、後述する (48a) と (48d) の適格性は、素性 [+TopicFocus] の部分素性 [+Focus] の上昇浸透が適用される場合の素性 [+topic] が Weak と指定されることを示す。よって、(47a) における定動詞は、Agrs 位置に生成され则认为なければならない。
- 19) (48a) において、同時に素性 [+neg] が付与される派生は、ERM によって排除される。厳密な論考の余裕はないが、定動詞は、素性 [+neg] を付与された Pol 位置まで主要部移動する则认为られる。よって、(48b) に対応する適切な派生として、(48c)、あるいは以下の (i) が指定される。

(i) *ninguém telefonará provavelmente às 5*

同一の Pol に素性 [+neg] と [+dS-TOPIC] が付与可能であると前提した場合、以下の予測が可能となる。

- (ii) a. nada a Maria/a Maria nada comprou na loja
 ' a Maria did not buy anything at the shop '
 b.*nada a ninguém/a ninguém nada comprou a Maria na loja
 c.*nada a ninguém/a ninguém nada a Maria comprou na loja
 ' a Maria did not buy anybody anything at the shop '

- 20) BP- と BP- において、素性 [+wh] の上昇浸透が発動すると考えられる。この場合、(50b) と (50c) が適格と予測されることになる (調査の要) 。
 21) 本稿の (9c) の適格性からして、以下の (ia-b) が適格と予測される (本稿で検討されるすべての BP において)

- (i) a. a quem o João provavelmente deu esse livro?
 ' to whom did João probably give this that book? '
 b. que/que livro o João provavelmente deu à Maria?
 ' what/which book did João probably give to Maria? '

- 22) BP において、素性 [+neg] を付与された Pol は Pol' まで投射されると想定されている。よって、BP の用例としての (54d) が不適格と予測されることになる (検証の要) 。BP における [+quantifier] XP に関する考察は、稿を改める。
 23) 例えば (55b) と (55d) における [-dS-TOPIC] Adjunct (*em Lisboa*) に対して 左方転移 (Left Dislocation) が適用された場合の派生は、適格と予測される。
 24) BP の用例としての (57b) と (57d) もまた、適格と予測される。これらの用例において、主語 NP (*a Maria, eles*) が Spec(Agrs) 位置に生起、あるいは当該位置を経由可能である。
 25) 全ての EP において、(57d) が不適格と判断される場合、素性 [+quantifier] の下方浸透が Agrs まで適用されると考える必要がある (更なる調査が必要) 。
 26) これまで想定された本稿の仮説群は、BP の用例として (58b-c) を不適格と予測する。 (58a) は、適格と予測される。BP において、(ia-b) が適格と予測される。EP の用例としての (ia) は、適格と予測される。Pol_i に素性 [+neg] が付与された場合にも、定動詞が Pol_i に生成されるならば、(ib) が適格と判断される EP グループも存在することになる。

- (i) a. ele nada deu ao menino
 b. nada ele deu ao menino
 ' he didn't give anything to the boy '

- 27) Madeira (1995) が属すグループにおいて、Pol に付与された素性 [+affective] は、Agrs まで下方浸透する。当該グループにおいて、[+FocusT] が関与する本稿の (56b) は、不適格と予測されることになる。
 (59a) は適格と判断される。これは、素性 [+quantifier] と素性 [+affective] が同一の Pol に付与可能であることを物語る。素性 [+affective] ([+quantifier]) と素性 [+dS-TOPIC] が同一の Pol に付与されることはないと考えられる。
 28) Kato & Raposo (1996) は、本稿で想定される素性 [+quantifier] , [+affective] と素性 [+neg] が生起する派生を単一のグループを構成する (これを、Affective Constructions と呼んでいる) 。本稿で示されたように、上の素性はそれぞれ別個の特性をもつと考えるべきである。素性

[+wh] に対して、素性 [+affective] と素性 [+quantifier] がもつ共通点 (類似点) に関しては、稿を改めて検討する。

29) これに関する詳細は、石岡 (1999) を参照されたい。

Vallduvi は、以下のカタロニア語用例を挙げる。通常、複数の NPI 要素が左方移動する派生は、排除される。しかしながら、*mai* (never) が左方移動した派生において、他の NPI 要素の左方移動が許容されると言う (Vallduvi 1992: p.337)。(ia,b) は、Vallduvi がスペイン語における B グループに対応するグループに属すると考えることにより説明される。(ii) の用例は、問題を惹起する。B グループでは、(iia) のタイプが適格と判断される。(iib) のタイプは、不適格と判断される。現実には、(iia-b) が共に不適格と予測される。この問題は、素性 [+neg] が付与された Pol₂ が Pol₂' まで投射されると考えることにより打開される。(Pol₂ に付与された素性 [+neg] が Agrs まで下方浸透すると考えられる)。さらに、S 移動する NPI 要素同士の Absorption (演算子合併) が発動すると考えられる。これにより、(i) と (ii) が説明される。(iia-b) は、ERM によって排除される (複数の要素が、Pol₂' に左方付加した位置に生起する)。スペイン語同様、素性 [+dS-TOPIC] を付与された Pol が PolP まで投射されない (Pol' まで投射される)。

- (i) a. *mai ningú/ningú mai* (no) *trucarà* (Vallduvi (p.c.))
 never nobody/nobody never (not) will call 'nobody will ever call'
 b. *mai res/resi mai* (no) *t'hoi donaran* (Vallduvi (p.c.))
 never nothing/nothing; never (not) to you it will give 'they will never give you anything'
- (ii) a. **què mai* (no) *regalen a la Marta?* (Vallduvi (p.c.))
 'what do they never give to Marta?'
 b. **què ningú* (no) *regala a la Marta?* (ibid.)
 'what does nobody give to Marta?'

この論法は、(iiic) を不適格と予測する。同時に、(iiia-b) もまた、不適格と予測される (問題点)。この問題は、D-Linked Wh 要素に関する先行詞統率要件が Binding によって代替されると考えることにより打開される。D-Linked Wh 要素 (*quins d'aquests objectes, quina de les seves amigues*) が左方移動する (iiia-b) が適格と予測されることになる。

- (iii) a. *quins d'aquests objectes ningú* (no) *regala a la Marta?* (Vallduvi (p.c.))
 'which of these gifts will nobody give to Marta'
 b. *quina de les seves amigues la Carme ofendria amb més facilitat?* (ibid.)
 'which of his girlfriends would Carme offend more easily?'
 c. **què al Roc* (li) *donaràs?* (Vallduvi 1992: (5d))
 'what will you give to Roc?'
 d. *a cuál de sus amigas Carmen ofenderia con más facilidad* (Spanish) (Vallduvi (p.c.))
 'which of his girlfriends would Carmen offend more easily?'

以下の (iva) と (ivb) の対比が興味深い。カタロニア語において、素性 [+neg] を付与された Pol₂ は、Pol₂' まで投射される。スペイン語では、当該素性を付与された Pol₂ が Pol₂P まで投射される。よって、Simple Wh 要素が生起するカタロニア語用例 (iva) は、不適格と予測される。スペイン語用例 (ivb) は、適格と予測される。(ivc) の非文性からして、Contreras (1996) において、*qué* + NP が D-Linked Wh 要素として機能することはない。Arnaiz (1992) の用例 (ivd) は、*qué* + NP が D-Linked Wh 要素として機能する話者グループの存在を物語る。

- (iv) a.*qui poques coses farà? (Catalan)(Vallduví 1992: (31b))
 ‘ who will do few things? ’
 b. ¿ qué libros poca gente lee? (Spanish)(Contreras 1996: (18b))
 ‘ which books do few people read? ’
 c.* ¿ qué libros Juan lee? (Spanish)(ibid.: (18a))
 ‘ which book does Juan read? ’
 d.? ¿ qué platos Juan ha preparado para la comida? (Spanish)(Arnaiz 1992: (10b))
 ‘ which dishes has Juan prepared for the meal? ’
 e.* ¿ qué Juan ha preparado para la comida? (Spanish)(ibid.: (10a))
 ‘ what has Juan prepared for the meal? ’

30) Ron (1998) が挙げる Caribbean Spanish (CS) の用例は興味深い。(ia-b) の適格性は、一般的に Wh 要素に関する先行詞統率要件が Binding によって代替されると想定することにより説明される (Standard Spanish と同様に、素性 [+dS-TOPIC] を付与された Pol は Pol' まで投射され、素性 [+neg] と素性 [±dS-TOPIC] が同一の Pol に付与されることはない)。素性 [+TOPIC] と素性 [+TopicFocus] もまた、同一の Pol に付与されることはない。Pol に付与された素性 [+TopicFocus] は、順次 Agrs まで下方浸透する。素性 [+neg] を付与された Pol が Pol' まで投射され、当該素性が順次 Agrs まで下方浸透すると考える。これにより、(ii) の非文性が説明される。

- (i) a. ¿ qué tú piensas (tú) ? (CS)(Ron 1998: (11a, a'))
 ‘ what do you think? ’
 b. ¿ a quién Ana le regaló un libro? (CS)(ibid.: (11b))
 ‘ who did Ana give a book to? ’
 (ii) a.*a nadie Lola le canta nunca esa canción? (CS)(Ron 1998: (60b))
 ‘ Lola never sings that song to anybody ’
 b.*a nadie esa canción se la canta nunca Lola (CS)(ibid.: (61b))
 ‘ Lola never sings that song to anybody ’
 c.*ESTA ESTATUA Ana le regalará a Juan (CS)(ibid.: (61b))
 ‘ THIS STATUE, Ana will give to Juan ’
 d.*ESTA ESTATUA nadie/*nadie ESTA ESTATUA le regalará a Juan (CS)(ibid.: (138b, c))
 ‘ THIS STATUE, nobody will give to Juan ’
 e.*nadie nada aprendió en esta escuela (CS)(ibid.: (128))
 ‘ nobody learned anything at this school ’

Ron (1998 : p.201) は、上の (iia) と (iic) に対応する語順 [Focus XP + Subject + V] と [NPI + Subject + V] が許容される CS の下位方言の存在を指摘する。当該方言グループの用例として、(iii) を挙げる (当該用例は、他の CS 方言と Standard Spanish では不適格と判断される)。

- (iii) a. ¿ cuánto DE AQUÍ tú sacaste? (CS)(Ron 1998: (276a))
 ‘ how much did you take FROM HERE? ’
 b. ¿ cuándo tú A CARMEN le hablaste? (CS)(ibid.: (276b))
 ‘ when did you talk to CARMEN? ’

この事象は、以下の論法によって説明されると考えられる (以下の論法は、基本的に Ron

(1998) と Toribio (1993) による説明法を本稿の理論枠組みから再解釈したものである)。特定の CS 下位グループにおいて、主語 NP が Spec(A_gs) 位置、あるいはそれが基底生成された位置において格 (Nominative) を付与される。さらに、当該グループにおいて、最大投射に付与される素性 [+neg] と Focalization に随伴して定動詞に付与される素性 [+topic] が Strong、あるいは Weak と指定される (最大投射に付与される素性 [+neg] と、Focalization に随伴して定動詞に付与される素性 [+topic] が共に Weak と指定されることはない)。つまり、(iia, c) における主語要素は、Spec(A_gs) 位置に生起する。定動詞が A_gs 位置に生成される。結果として、(iia, c) は、ERM の要請を満たす (適格と予測される) (iib, d, e) は、生成不能、あるいは ERM によって排除される。(iia) において、主語要素 (*tú*) は、Spec(A_gs) 位置にある。Pol₁ (あるいは Pol₂) に付与された素性 [+TopicFocus] が順次 A_gs まで下方浸透する。Focus 要素 (*de aqui*) は、A_gsP に左方付加した位置を経由して、Pol の Checking Domain へ移動する。(iib) において、素性 [+dS-TOPIC] が Pol₁ に付与される。素性 [+TopicFocus] が Pol₂ に付与される。Wh 要素 (*cuánto, cuándo*) の移動が ERM 違反を惹起する。しかしながら、CS 一般において、Wh 要素に関する先行詞統率要件が Binding によって代替される。結果として、(iia-b) は共に適格と予測される。

参考文献

- Ambar, Maria Manuela (1992) *Para uma sintaxe da inversão sujeito-verbo em português*. Edições Colibri, Lisboa.
- Ambar, Maria Manuela (1999) "Aspects of the Syntax of Focus in Portuguese." Georges Rebuschi and Laurice Tuller (eds.) *The Grammar of Focus*. John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia.
- Arnaiz, A. (1992) "On Word Order in Wh-Questions in Spanish." *MIT Working Papers in Linguistics* 16, 1-10.
- Barbosa, Pilar (1993) "On Clitic Placement in Old Romance and European Portuguese." *CLS* 29, 33-59.
- Barbosa, Pilar (1995) *Null Subjects*. Ph. D. dissertation, Massachusetts Institute of Technology.
- Belletti, Adriana (1988) "The Case of Unaccusatives." *Linguistic Inquiry* 19, 1-34.
- Belletti, Adriana (1990) *Generalized Verb Movement*. Rosenberg & Sellier, Torino.
- Brito, Ana Maria and Pereira de Matos, Maria Gabriela Ardisson (1974) "Introdução ao estudo das interrogativas em português." *Boletim de Filologia* 23, 191-254.
- Chomsky, Noam (1986) *Barriers*. MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Chomsky, Noam (1992) "A Minimalist Program for Linguistic Theory." *MIT Occasional Papers in Linguistics* 1.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*. MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Cinque, Guglielmo (1993) "A Null Theory of Phrase and Compound Stress." *Linguistic Inquiry* 24, 239-297.
- Contreras, Heles (1989) "Closed Domains." *Probus* 1-2, 163-180.
- Contreras, Heles (1991) "On the Position of Subjects." Rothstein, S. (ed.) *Syntax and Semantics* 25.
- Contreras, Heles (1996) "Economy and Projection." Claudia Parodi, Carlos Quicoli, Mario Saltarelli, and María Luisa Zubizarreta (eds.) *Aspects of Romance Linguistics*. Georgetown University Press, Washington, D.C.
- Costa, João (1996) "Positions for Subjects in European Portuguese." *WCCFL* 15, 49-63.
- Galves, Charlotte, C. (1996) "O enfraquecimento da concordância no português brasileiro." Ian Roberts and Mary A. Kato (orgs.) *Português brasileiro: uma viagem diacrônica*. Editora da Universidade Estadual de Campinas UNICAMP, Campinas.
- Gärtner, Eberhard (1994) "Portugiesisch: Syntax." Günter Holtus, Michael Metzeltin, and Christian Schmitt (eds.) *Lexikon der Romanischen Linguistik* VI, 2, 241-270.
- Gärtner, Eberhard (1998) *Grammatik der portugiesischen Sprache*. Max Niemeyer Verlag, Tübingen.

- Haegeman, Liliane (1995) *The Syntax of Negation*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Howard, Harry duBignon (1993) P, Affective Inversion, and Topicalization in English and Spanish. Ph.D. dissertation, Cornell University.
- Inclán Nichol, Sara (1997) *Absence of Verb Inversion and Specificity in Peninsular Spanish WH-Questions*. Ph.D. dissertation, University of California, Los Angeles.
- Jiménez, María Luisa (1997) *Semantic and Pragmatic Conditions on Word Order in Spanish*. Ph. D. dissertation, Georgetown University.
- Kato, Mary Aizawa and Raposo, Eduardo (1996) " European and Brazilian Portuguese Word Order: Questions, Focus and Topic Constructions. Claudia Parodi, Carlos Quicoli, Mario Saltarelli, and María Luisa Zubizarreta (eds.) *Aspects of Romance Linguistics*. Georgetown University Press, Washington, D.C.
- Kemchinsky, Paola (1984) " Brazilian Portuguese and the Null Subject Parameter. " *Mester* 13, 3-16.
- Koopman, P. and D. Sportiche (1991) " The Position of Subjects. " *Lingua* 85, 211-258.
- Laenzlinger, Christopher (1998) *Comparative Studies in Word Order Variation: Adverbs, Pronouns, and Clause Structure in Romance and Germanic*. John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia.
- Lemle, Miriam (1984) *Análise sintática (teoria geral e descrição do português)* Editora Ática, São Paulo.
- Lobato, Lúcia Maria Pinheiro (1986) *Sintaxe gerativa do português: da teoria padrão à teoria da regência e ligação*. Vigília, Rio de Janeiro.
- Lopes Rossi, M. Aparecida Garcia (1996) " Estudo diacrônico sobre as interrogativas do português do Brasil " Ian Roberts and Mary A. Kato (orgs.) *Português brasileiro: uma viagem diacrônica*. Editora da Universidade Estadual de Campinas UNICAMP, Campinas.
- Madeira, Ana (1992) " On Clitic Placement in European Portuguese. " *UCL Working Papers in Linguistics (University College London)* 4, 95-122.
- Madeira, Ana (1993) " Clitic-Second in European Portuguese. " *Probus* 5, 155-174.
- Madeira, Ana (1995) *Topics in Portuguese Syntax: the Licensing of T and D*. Ph. D. dissertation, London University.
- Olarrea, Antonio Antxon (1996) *Pre and Postverbal Subject Positions in Spanish: A Minimalist Account*. Ph. D. dissertation, University of Washington.
- Ordóñez, Francisco (1997) *Word Order and Clause Structure in Spanish and other Romance Languages*. Ph. D. dissertation, The City University of New York.
- Perini, Mário A. (1989) *Sintaxe portuguesa: metodologia e funções*. Editora Ática, São Paulo.
- Perini, Mário A. (1998) *Gramática descritiva do português*. Editora Ática, São Paulo.
- Pinto, Manuela (1994) " Subjects in Italian: Distribution and Interpretation. " Reineke Bok-Bennema and Crit Cremers (eds.) *Linguistics in the Netherlands 1994*.
- Raposo Eduardo (1998) " Definite/Zero Alternations in Portuguese: towards a Unification of Topic Constructions. " Armin Schwegler, Bernard Tranel and Myriam Uribe-Etxebarria (eds.) *Romance Linguistics: Theoretical Perspectives*. John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia.
- Rizzi, Luigi (1990) *Relativized Minimality*. MIT Press, Cambridge.
- Rizzi, Luigi (1997) " The Finite Structure of the Left Periphery. " Liliane Haegeman (ed.) *Elements of Grammar*. Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.
- Rouveret, Alain (1999) " Clitics, Subjects and Tense in European Portuguese.. " Henk van Riemsdijk (ed.) *Clitics in the Languages of Europe*. Mouton de Gruyter, Berlin/New York.
- Ron, María Pilar (1998) *The Position of the Subject in Spanish and Clausal Structure: Evidence from Dialectal Variation*. Ph. D. dissertation, Northwestern University.
- Silva, Gláucia Valéria (1999) *Word Order in Brazilian Portuguese: a Minimalist Analysis*. Ph. D. dissertation, The University of Iowa.
- Suñer, Margarita (1994) " V-Movement and the Licensing of Argumental Wh-Phrases in Spanish. "

Natural Language and Linguistic Theory 12, 335-372.

Teyssier, Paul (1984) *Manuel de Langue Portugaise (Portugal-Brésil)*. Éditions Klincksieck, Paris.

Thomas, Earl W. (1974) *A Grammar of Spoken Brazilian Portuguese*. Vanderbilt University Press, Nashville.

Toribio, Almeida J. (1993) *Parametric Variation in the Licensing of Nominals*. Ph. D. dissertation, Cornell University.

Torrego, Esther (1984) " On Inversion in Spanish and Some of its Effects. " *Linguistic Inquiry* 15, 103-129.

Torres Morais, Maria Aparecida C. R. (1996) " Aspectos diacrônicos do movimento do verbo, estrutura da frase e caso nominativo no português do Brasil. " Ian Roberts and Mary. A. Kato (orgs.) *Português brasileiro: uma viagem diacrônica*. Editora da Universidade Estadual de Campinas UNICAMP, Campinas.

Uriagereka, Juan (1995) " Aspects of the Syntax of Clitic Placement in Western Romance. " *Linguistic Inquiry* 26, 79-123.

Vallduví, Enric (1990a) " The Role of Plasticity in the Association of Focus and Prominence. " *Eastern States Conference on Linguistics* 7, 295-306.

Vallduví, Enric (1990b) *The Informational Component*. Ph. D. dissertation, University of Pennsylvania.

Vallduví, Enric (1992) " A Preverbal Landing Site for Quantificational Operators. " Albert Branchadell, Núria Martí, Blanca Palmada, Josep Quer, Francesc Roca, Jaume Solà, and Enric Vallduví (eds.) *Catalan Working Papers in Linguistics* 1992, 319-343.

Vallduví, Enric (1993) " Catalan as VOS: Evidence from Information Packaging. " William J. Ashby, Mariane Mithun, Giorgio Perissinotto, and Eduardo Raposo (eds.) *Linguistic Perspectives on the Romance Languages*. John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia.

Zanuttini, Raffaella. (1991) *Syntactic Properties of Sentential Negation. A Comparative Study of Romance Languages*. Ph. D. dissertation, University of Pennsylvania.

Zanuttini, Raffaella (1994) " Re-Examining Negative Clauses. " Guglielmo Cinque, Jan Koster, Jean-Yves Pollock, Luigi Rizzi, and Raffaella Zanuttini (eds.) *Paths Towards Universal Grammar*. Georgetown University Press, Washington, D. C.

Zubizarreta, María Luisa (1994) " El orden de palabras en español y el Caso nominativo. " Demonte, V. (ed.) *Gramática del español*, Centro de Estudios Lingüísticos y Literarios, El Colegio de México.

Zubizarreta, María Luisa (1998) *Prosody, Focus, and Word Order*. MIT Press, Cambridge, Massachusetts.

石岡精三 (1999) 「スペイン語の Exclamative 構文における素性 [+emphatic] と [+affirm (ative)] の付与について」長岡技術科学大学『言語・人文科学論集』13, 39-82.